



東海道名所圖會

一



此の神一天皇御宇十三年秋
川原の宮に於て一
乃ち此の宮を建てて
たのち十三年の秋
阿波方より一
葉の一天皇御宇十三年の秋

常磐蔵書印

のりたつてゝもいふはなれぬ
せうじつをえんかゝるゝもいふ
はなれぬゝもいふはなれぬ
きのもめゝもいふはなれぬ
おのゝもいふはなれぬ

おのゝもいふはなれぬ
あなゝもいふはなれぬ

中山前大納言愛親卿

借法守主

凡例

東海道へ系師より多く、是より江戸不到は都く十州より其
驛治と標せし名所古跡神社佛院と圖會と次驛と圓圍と
を以て題し行程に其下小署あり

海道の神社を延喜式神名帳に載るは選んて記に郷里ありて
生土神ありて多く勸信の神祠ありて是は除く然も是より大慶より
到て攝人多載る寺院も亦ありて古刹と撰んで記し末瓜
の濱寺道場の際と際限ありて是も亦省く大略畿内名所
圖會此例に倣は

東海道より五里七里入るの地も亦名神名刹ありて是も亦撰る所謂
尾州津島天王之州風来寺遠加秋葉山相州大心寺江嶋
鎌倉等ありて是も亦撰る
軍く方位と示し多し是位も循る多某の東の里某の西の所も

ありと證し或は左の方右の方と系師より東國より往く旅者の
左右あり

引書は古本流布の記し和歌代々の撰集詩賦は名家の文集は
引據は軍談に其要と撮んで記し神廟梵刹の由縁を社人
寺僧の記せるは勅又村翁野史の記し是も亦載る事あり

世小鴨長明道之記同海道記といふ二書あり 是は校へる事
長明の兼元五年十月十二日鎌倉下向し將軍實朝公に謁し
法善堂より懐舊の和歌詠し奉東艦ふんゆ厥后六年と巻く
建保四年六月八日其杖六十四葉ありて卒と此事方丈記訶説に詳に

録せり初の長明道之記仁治二年八月十日系公ありて長明示寂の後
其六年と巻くありてあれは多田滿仲共代孫從五位下伊賀守源光朝
の記し和奇は其集み入る光朝と記せり杖六拾葉ありて書成
源親りといふは親の光朝の長子ありて是圖之は卷中ありて

先づ紀の記と長明の記とを海通記の貞應二年卯月上旬
 花洛と出早と書るも亦長明入寂の後七年と歴にけり
 和秋長明の祠は後の賢と書る所ありて書るも真不詳の風體
 白ありて長明の祠と書るも長明の多名抄方丈記の二書
 とも外あり又兼好のほしく竹月長明四季物語引と其頃の書
 亡びるるれん今世ある四季物語の二書後の准(元)の書あり
 一 ありて古人の紀り名地の圖海道中記の致治多し
 海道原古今政と書る書とる不惑ふ事多し
 見圖公記に猶脱漏は後の補遺に俟の
 一 画圖の系師江戸及び諸邦に寄合書と故小画毎に姓名下章あり
 細圖浪速竹原春泉齊の一筆ふりて姓名公記と書

東海道名所圖會卷之一

目錄

平安城	洛東風系	三條橋	粟田
日正	山科	四宮河原	小園城
追分	相阪山	走井	遠坂園
山辺西國場	禪丸祠	園寺小町趾	山神森
園清水	園明神祠	園小川	夕向山
安善寺	世喜寺	顯證寺	大津
大津宮	練貫水	又檀道	長等山
三井寺	新羅明神	護法善神	柳屋推現
唐院	金堂	新山王	寶藏
辨入祠	住吉祠	經藏	大徳寺
圓満院御殿	安樂行堂	彌陀八幡	大徳寺
八幡樓	安樂石塔	龜鳴橋	水鏡寺
常在寺	早尾祠	龜鳴橋	水鏡寺
淨明水	二王門	三井十景	南院
			北院
			中院
			南院

智澄大師傳藏
乃天皇三傳

滋賀花園

志賀津

梵釋廢寺

唐崎一ツ松

八王子宮 枳社

神祖御宮 額佛堂 金鼓堂

真葛原

與成宮

石占井

妙見祠

歡喜石
鼠祠
走井大師堂
八柳
經子宮
西教寺
浮御堂
比良
菊濱 王造
芭蕉堂
大州原
栗津野
兼平墳

司御影鑑

志賀山祇

黒主祠

明智光秀城趾

日吉山王神社之宮

二宮 攝社 二十六人 飯土圖

客人宮 枳社

三宮 金岩

四屋若宮

磯成宮

同祠

大將軍祠

和孝和行邸
彼若石
走井宮
滋賀院
山王系圖
朱迎寺
勾當内侍古蹟
抄出濱
奉會館總貫
膳所 吾孫若石
栗津社

志賀都

滋賀浦

貫之祠

唐崎

春日祠

十禪師宮 枳社

中七社

桓武天皇御廟

南若宮

比叡辻

久多井

百枝祠

大政所 宿院
地藏堂
猿塚
神宮
比叡山
苗麻神社
大伴櫻
四宮社
松本渡口
栗津里

志賀里

滋賀大輪田

崇福廢寺

幸崎神祠 山王系
止土渡 枳社

聖真子宮 枳社

夢妙幢石 明聖水

下七社

慈眼大師廟

登町若宮二社

若宮

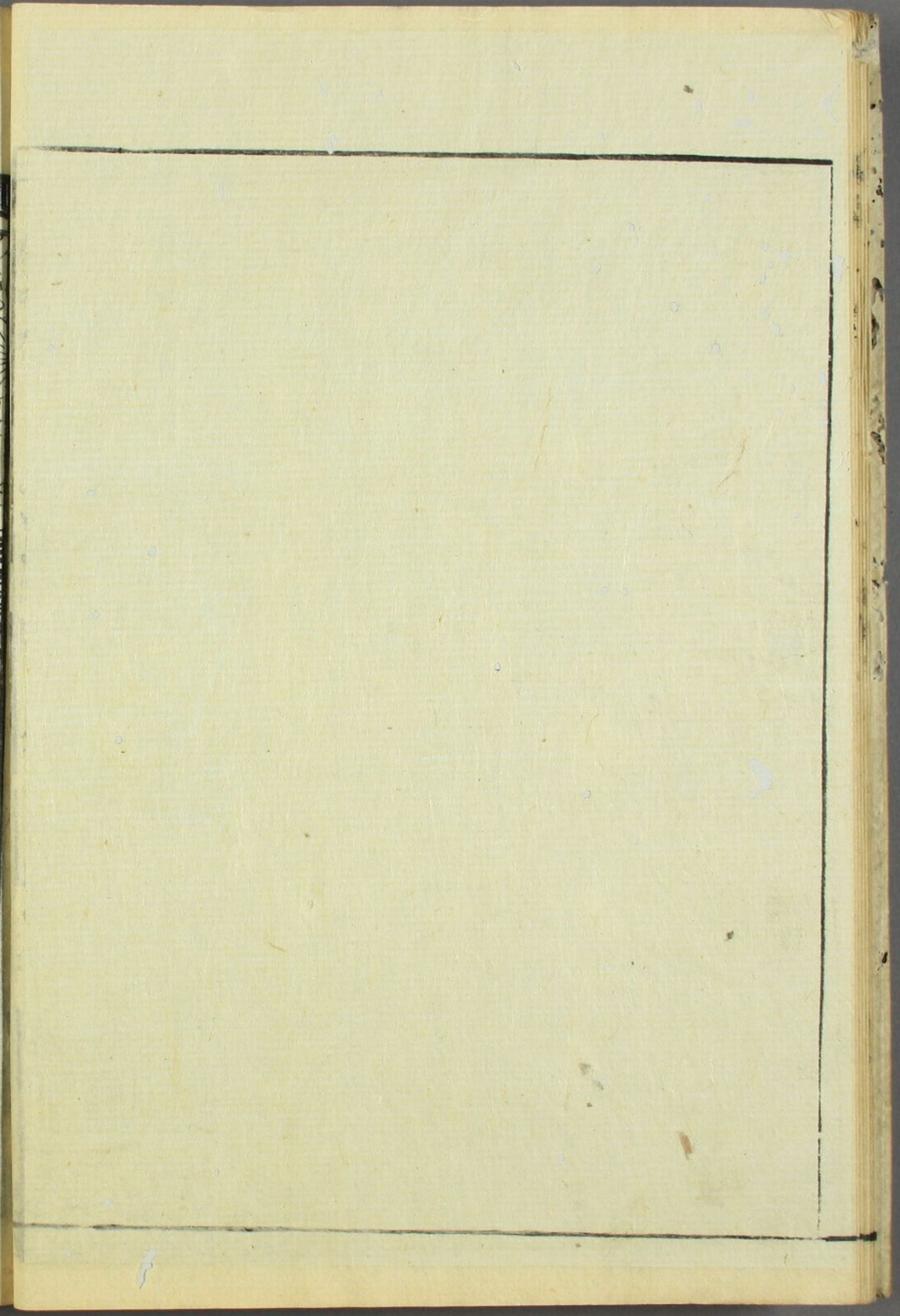
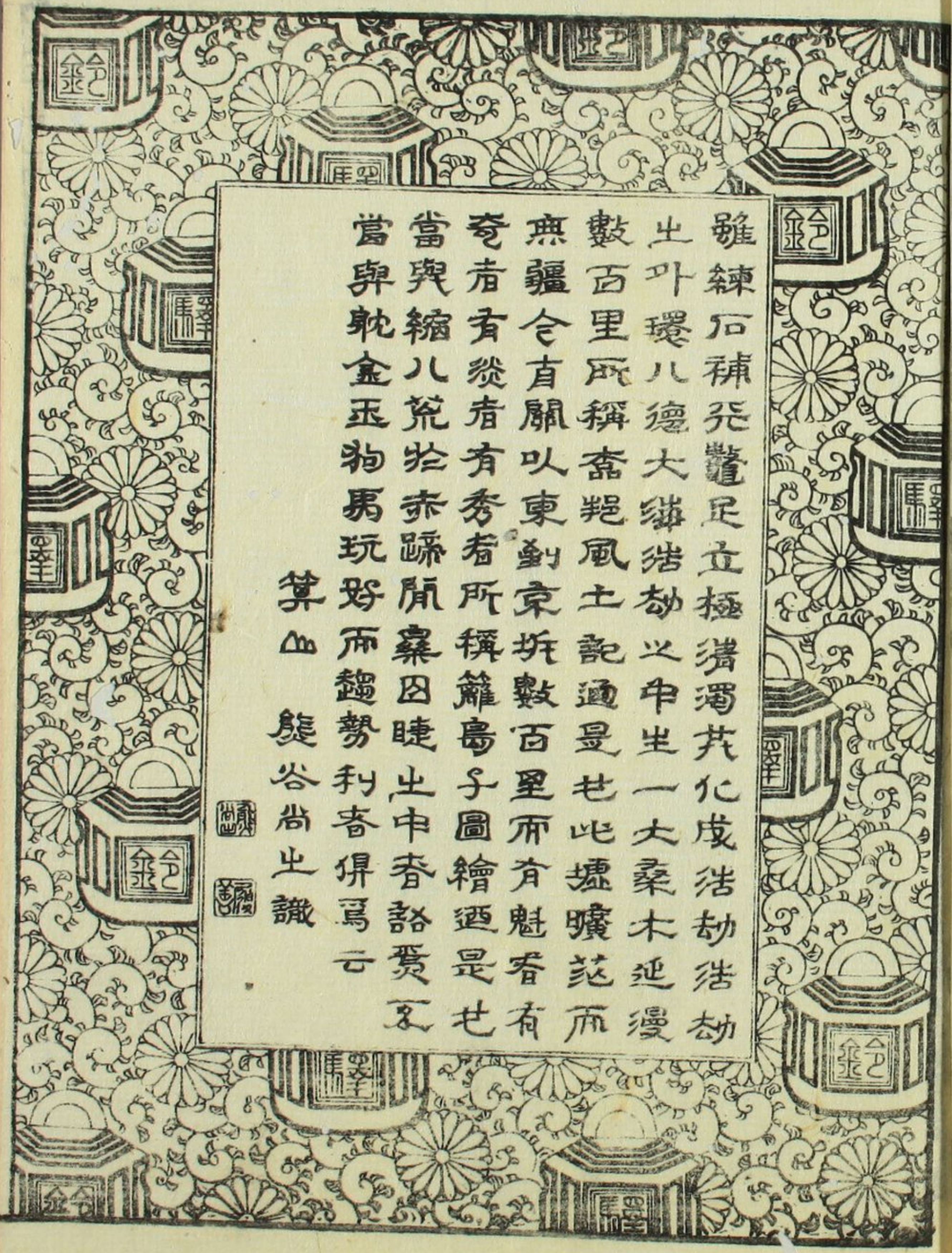
生源寺

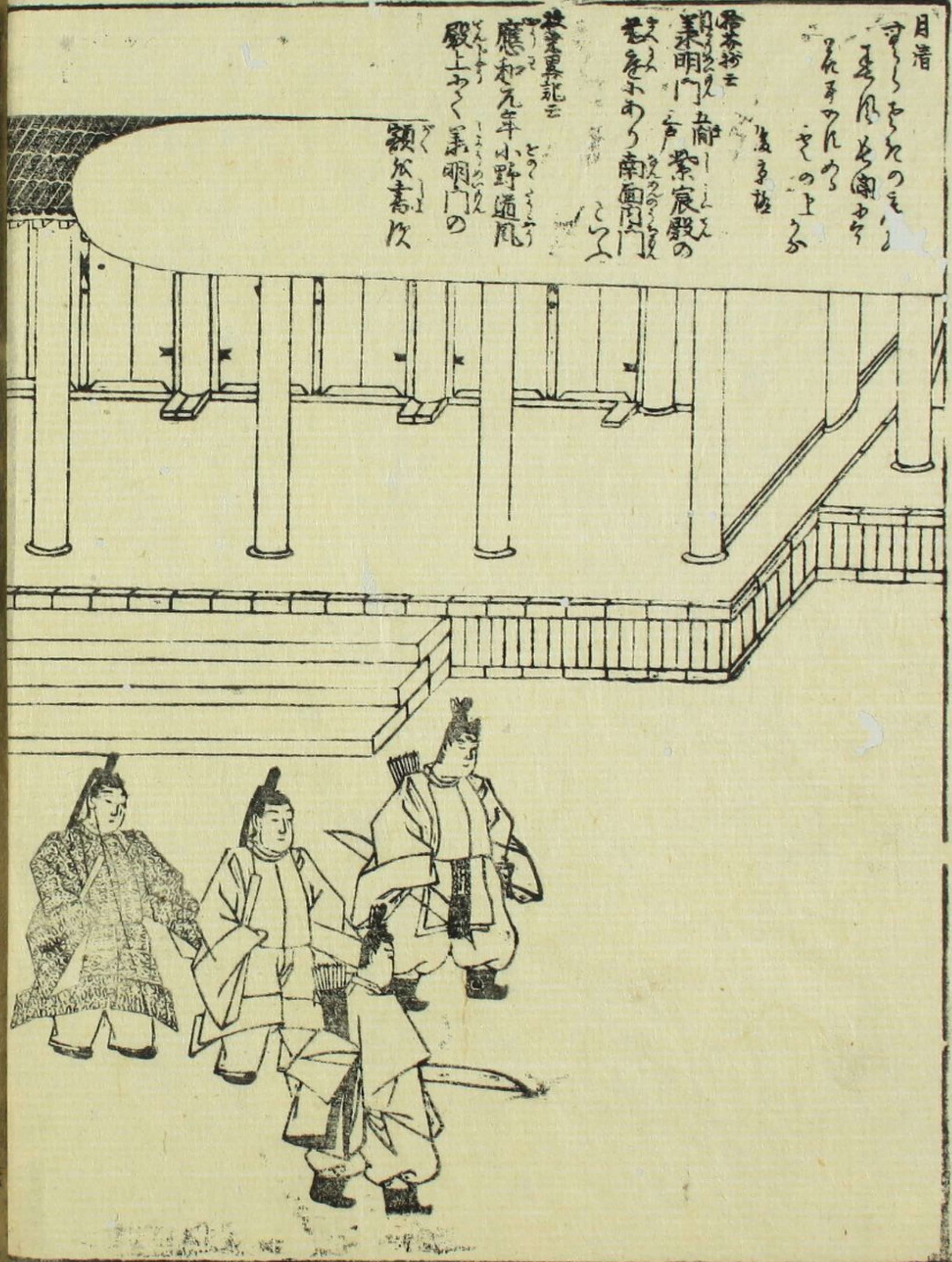
小五月會岡

王子宮 靈石
早尾社
塔下惣社
神路山
四明嶽 富士山遠景
堅田浦
真聖入江
精大明神祠
義仲寺 義仲墳
陪膳濱
栗津松原

雖練石補元釐足立極清濁共化浩劫浩劫
 出叶環八德大憐浩劫以中生一大桑木延漫
 數百里所稱畜艷風土託通曼世此墟曠茫而
 無疆令直願以東到京坻數百里而有魁者有
 奇者有從者有秀者所稱籬島子圖繪迺是也
 當與縮八荒於赤跡閒窳因睫出中春詒賈云
 當與孰金玉狗馬玩好而趨勢利者俱焉云

箕山 巖谷尚出識





目清
可くしをたのま
まのれを御か
るんやれん
その上ふ
後手板
香林抄云
美明門南
紫宸殿の
敷下あり南
面門
社名異記云
應和元年小野通凡
殿上あり美明門の
額が書けり

草薙御劍 申奉け初の御名ハ大叢雲劍と申あり 倭姫世書ハ瓊瓊杵尊

八咫鏡草薙劍之三種神寶也云々皇孫小授給ハ永八國云々

日本書紀曰 素盞烏尊出雲國敷川上ハ大降キ 倭臣時哭聲聞ク

あれと尋ルハ老るマ婦の者あり 其中小者人の少女也 是て極く悲しくむ

素盞烏尊向キテハ汝達ハ誰又何ゆハ斯く悲クモ 夫婦共々 杖等ハ此

所の國神々々脚摩乳妻ハ子摩乳トシテ 壯者女ハ吾兒也 一々名

奇稲田姫トシテ 此中ハ八岐大蛇あり 往ハ吾兒と云ク 吾等今又老人

殘リ一々女も云ク 吾等今又老人 脱免ハ術ナシ 故ハ嘆息傷キ

素盞烏も俱ハ歎ナシ 吾等の大蛇と戰ヒ 若ハ女子と云キ 吾等今又老人

老人亦喜ビ 初ハ隨ヒ 吾等素盞烏尊稲田姫の湯付ハ爪櫛也 是レ

御髪ハ櫛キ 是レ婦ハ八の槽ハ酒と盛テ 待テ 早具期ハ至マシ 山河震動シ 大蛇

現レ 牛ノ首尾ハ岐あり 眼ハ酸鼻の如シ 背ハ松柏生茂リ 八五八谷の向ハ葛

延ク 頭ト上ハ槽の酒ト飲テ 醉ル 其時素盞烏所帶キ 十握

劔ハ抜ク 大蛇ト寸々斬ル 尾ハ至ク 劔ハ又ハ一缺リ 則其尾ハ裂ク 視

ク 此ハ一の劔あり 大地の所居ル 上ハ常小村を覆ク 是レ大叢雲劔ト 斯レハ

其レハ此寶劔人代ハ傳テ 神日本尊余彦天皇 神代の蹤ト 能日向國

宮崎小都ト 是レ此時天下草昧ナリ 封域イマシテ 定メ 故ハ寶劔ト云ク

四海と治メ 初ク 帝亦ハ大和國橿原宮ハ遷幸ス 是レ履后十二代 大足度

刃代別天皇 景行 二十八年春二月朔日 皇子日本武尊筑紫の板敷熊襲ハ

一舉ハ滅ビ 其國ハ神謫ノハ 是九州院ハ治メ 百姓柔順ト 祖ハ同帝紀四十年

夏六月 東夷叛逆ノリ 瓜奏次孫 天皇芥鉞ト 持テ 日本武尊ハ授ケ 東國

安秦ト云ケ 詔メ 是レ曰 朕聞 東夷ハ識性暴強ナリ 汝ハ記瓜宗ト云ク 汝ハ

邪神あり 邪ハ女也 鬼あり 乃ハ街衢ハ遮リ 人ト弊シ 其賊徒の中ハ 蝦夷

ハ強シ 男女交シ 父子の別ナシ 冬ハ穴ハ窟シ 夏ハ標ハ棲モ 瓜夜ト云ク 血瓜飲テ

昆茅相疑ヒ 山ハ登ル 飛禽の如ク 郊ト行キ 羊走獸の如ク 擊ハ草ハ踏ミ 追ハ

瓜入ク 瓜ト嗜ビ 古ナリ 己未イマシ 王化ハ深ク 今朕汝ガ為人ト云ク 瓜身體

長大く容姿端正の力に杜門を枉る猛な半雷の如く向所放なく攻所
必勝をといふ事か、則ち之體の吾子ありて實に神人たるは是も天啓の報
を蒙る國の不平を詳説く天業を經綸宗廟を不易ありて人の命なりん
是天下の則治る天下の賢位に則治る位に願ひ謀深く遠慮を具し暴賊
を鬼成攘退し詔ありて日本武尊斧鉞を授け再拜して奏し曰
嘗て西戎を征するの年天威を施し秦楚を戮し其後決辰も経る
東夷暴逆は速く天神地祇を祀り天皇の聖恩を蒙りて其境に際し德
教を示し猶服せざるものありて忽ち兵を發してこれを誅討し四海を謐
叔多と慰まん天皇亦吉備武彦大伴武日連を日本武尊の從り
七掬脛を賜えり冬十月初日威風凜々として出陣しそま川
枉道して伊勢皇太神宮に再拜し倭姫命を拜し曰今詔を被て東征し
反賊を誅んと欲は是倭姫命寶劍を授け慎み怠るる事なかりきと
命し日本武尊立ち駿河國に至る其地の女賊賊場能人尊と曰

い郊小麋鹿あり氣を霧の如く足は森林の如くあふ臨み將りて奏次
尊其言を信し曠野に入て悠々然として覓獸しや女賊賊思圖將り
相圖の狼煙を上げ伏せ一たふを其業放火し大兵を塵おせんを尊
驚破謀をぬかりく佩るる寶雲の寶劍をとりて單で薩樓の如く
ていひく風忽然として襲ふ賊軍一吹靡れ猛火熾ふれば賊兵途次
喪ひ烟を噴で倒れ外を風威し強く四方に備々たりて逆賊殺す
討てたり於是草薙神劍を改め其甲を燒けしむ尊直に進んで
相模國に就上総に至り賊を海上に落し暴風忽起して王船を覆せん
尊の從りて愛妻橘媛宣を介つて清波船を以て海神乃
所爲之願に妾尊を贖く海に入尊の所身を懸けん言訖て瀨の座を入
り暴風忽止ん王船を着岸し敵討時の人其海に馳水し入尊を上総
より陸奥へ入る暇あるを惠平がゆ凱陣の時時確日嶺に至り東方を臨み
三嶽を拜する宣は是國の女を吾婿といひ凡俗をさるけ縁を

ありて守護小下りる入付は鞍を背する馬に鞍も腹の戸を叩く通しけふしあり
日本紀孝徳帝の神宇大化二年小園宿公定免驛馬傳馬小鈴の契を付する事
ありて續日本紀及び延喜式に家次等令裁解等其の粗を云り

旅人の心宿へりつ々たる小驛の鈴乃とせひぐくたり

道細と里の駅は鈴赤山ありてくさる友よりくみり

神もさせりつ々雨と志の宿に駅の鈴は小お涼と聲

國王七鈴とりつ々七道つ々をみ官使つつ賜ふおれと下りてむきやほ

毎ふらうありて宿る其所と驛治とつ々驛舎の系師より江戸まで五十二

驛之洛陽教業坊二條橋は東海道の喉口ありつ々行程もあれより負持付け

橋上より洛東の風系をたふせせと本向く神社佛閣烈々たる洛の勝家あり

やゆる橋下の流水上小鴨皇太神宮ありつ々小鴨川とつ々名産の硯石水

乾ばして墨をふ艶ありつ々月のは日々小狐を喚く調貞ももる至て美味之

良むへ台嶺山巍然とつ々王城の鬼門と護る悪魔の壇に葉赤山清蓮社

一乘寺の隣り松石川丈山の詩仙堂白川の龍如意巖津土寺山の丈文字

月待心の麓より銀閣寺ありつ々神樂岡に田社の神祇官は齊場ありつ々

日本の神々成鎮する其南小真如堂黒谷西小百万遍東小永觀堂ありつ々鹿谷

談合谷松虫鈴虫の古墳光雲寺若王寺五山之上の南禅寺山腰ありつ々

駒の籠山嶺と獨秀岩ありつ々二條橋上より南と眺むる善頂山如恩教院

後山の山亭ありつ々四時花之に蹴鞠の習者糸井の宴會は院をめぐり遊

興公促次長樂寺東大谷雙林寺の西の石大雅が跡祇園女市の祠蹟

祇園社二軒茶を赤蔽腰襦とつ々豆腐切る若丁々より下海原の賦歌

の聲祇園町の待青雲の鬢はつ々花の顔落赤の雁り花香を白く筒井筒

つづくも共小杖ありつ々紅糸の志は小町紅流風まのく奇麗扇九つ十の

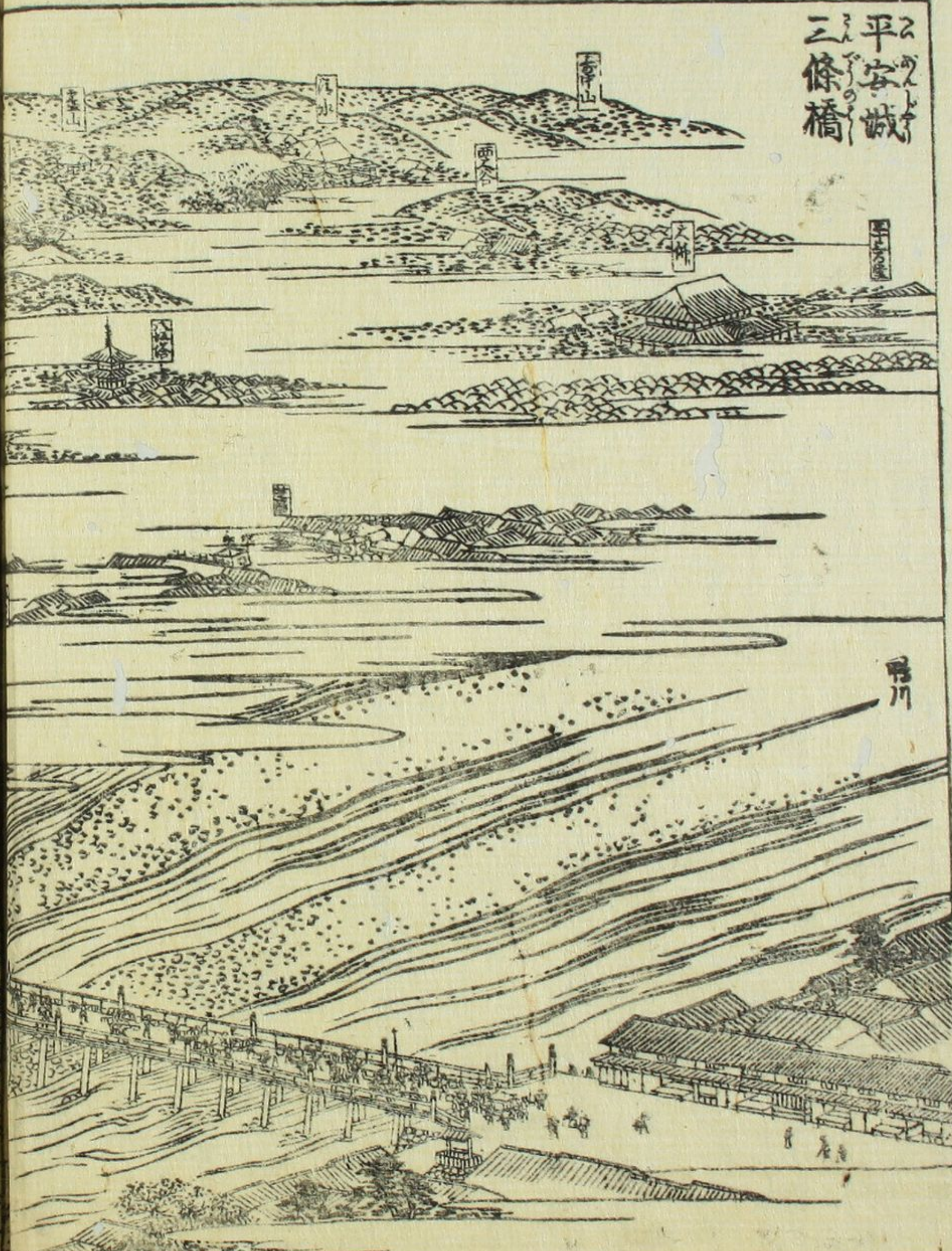
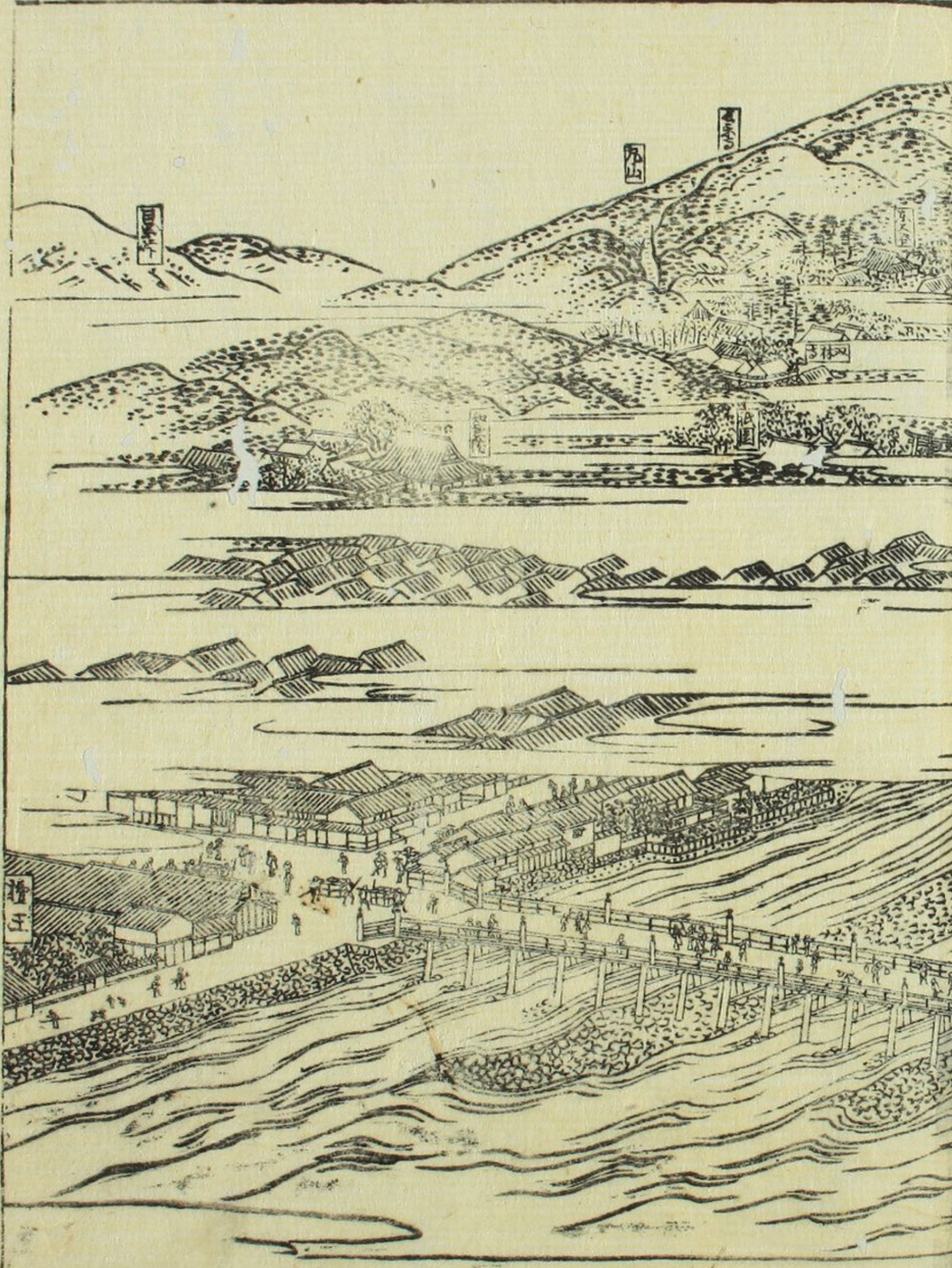
うかおとせの柏子よくそんくやをを鞠奇まの曙夜にわさる四糸河原の

夕涼蟬の羽差る深帷子若の肌とつ々れや一カ先の足ゆる鼻肩組芝居の早雲

花夫倉繩より小雨止地蔵尊建仁寺の陀羅尼の持六波羅密寺向ひ鈴

六道法化の南無地藏安井の金比羅社々池菊溪菊水年王祠寺一柱乃
て七観者小伽羅の八坂の庚申八坂の塔高基寺の姥嶽幽巖之合
のた靈山の樓閣より洛陽の萬戸群之る部山西大谷三寧坂經書堂
仲光寺子安の觀者車舎馬止先出れり清水寺小至る地まの極者
の極者水系流が九坂南の方成寺中山清閑寺とり入るの丹楓堂石
豐國山阿弥陀若經信忠信の石塔三塔社東小松谷とり入法然上人
旧蹟の津和あり是より苦集滅道諸谷々々山科より入津（出）る性遷之
大佛殿と大正年中秀吉公の清達之めりて盧舎那佛安し樓門あり
二王の大像内々金之の高麗物あり古豊國の社ありりと寺又南より石
塔あり世俗秀吉公の古墳と云傳入大鐘の南方回廊の外ありと千二箇
堂公蓮華王院とり入一千餘の觀者安次堂茶小夜泣水池の西の慈花
濃紫の毛簾々々け所の吳觀之後堂あり大天板あり諸侯の家ありと
赤く射術と操を東小妙法院法親王の清殿あり日吉社智積院末の源院

池田町より梵論の寺あり明暗寺とり入其南の栲園の松永貞徳居士
の遺蹟之新然社新然社觀者泉涌寺小泉涌水あり又佛牙乃舍利
紫々高し 帝王皇妃の清陵も當ふあり東福寺はる永氏の菩提
初めりて岡基の聖一國師五山の其一の初め地名は月輪と稱九條
奥白兼實の山莊之はゆふ月輪殿下と号は姪孫大御國光明峯寺
通家と稱法小澤しゆひ地と聖一國師小寺附し南都東大寺興福寺
と合く東福寺と稱は通天橋の紅葉の蜀錦のみし北殿司虎關の志傍
えい寺小住し思園池の龍圓栢の本木等名所ありとの峰輪荷社と
元明帝和銅四年二月初午日出現しゆ入延喜八年勝大政大臣を時正
三雲の社と修造は永言十年小社と山下今の池小橋は南小條草心寶塔寺
石塔寺の五百羅漢の石像極樂寺の旧跡小照宣との古墳あり元敏法師の位
伏見の栲山大和之路と北（中）と五條橋の系院の古蹟離々鳥離カ末
本願寺佛之寺の麓をて二条の橋より一眼小遠く定平安京の佳系あり



平安城
三條橋

川



東二條の森れ方
 世にのたまふの跡
 志んん方り吾事なり
 江戸中より作勢
 さつりの坂途ひあつ
 日岡跡上の茶店ふ
 集ひく酒庭と催
 のらん儀別留別の
 詩弁と送るも
 多めりた
 旅まやうの日の里ふ
 見送りく
 まの盆と
 掛け上り
 ほろよ

江戸中より作勢

洛陽

洛陽之條橋東海道之首よりく鴨川とさく白川橋あり南の方小青蓮院

寺門跡栗田寺殿金藏寺の之後堂本地藏栗田天皇美頂山に親習を人

植發る條あり柗美頂山と号する法華經を義小美頂佛種とんえり

中華天台山の最貴山時花結成されし美頂とありこれの謂ゆる

かゝん將軍坂の美頂の高嶺ふあり天下小災害ありん時を嚆勅とてねん

小飯詰道の水光秀ら原日山神明宮東岩倉大日山いさの土灰製しく

陶器師ありあね瓜栗田焼と賞次流上の清水へ牛糸丸吾妻よりる所

岡原與市と討く勇威を著し日固峠の本倉上人あふ菴をひそんく阪迄

と車ありゆきの人車牛小慈恵成流焼く懐千本松板とくく目長

の阪迄と具むく小所廟堂あり 大智帝は野小所待し中河忽然

とくく昇天あり所皆の落止る所小陵とて建たり 儀ありゆきと

人駢集ありゆきとあふかか一通りくるる車馬の多しとくく上

十階の身一と兼ふ八角の石あり天皇の所居は石上小落たり故小所宮石と

明王寺は陸村の小あり奉尊十一面觀音の慈覺大師の化之境内小鏡の池

あり 大智帝昇天し中河玉體は池水よりとらん陸村植堂村を

とくく深谷城あり 糸原六條橋へ出る下街道とあり 陸村大伴兩寺預寺への

とく科卿といふ中十六ヶ村あり深谷城と南小所を東西平獲寺の山科

寺の旧跡栗田寺の田村將軍廣文宅村あり二條右大臣若きこの塔西村

の廣東山寺深谷小町寺等あり道 女茶屋は別是道の小側ありは先祖を

片園世を流とく射術の達人入り小茶店小茶館を教る飾る吉祥山安祥寺

大師の陶基本を昆沙門王御寺務は法親王任職し中右法親王の標

あり護國寺といふ系師如傳寺小所法在諸羽明神の每あり大見を根

合所を又ふ諸葉とく書成或柳とくく楊柳と十彈寺四官村小あり

奉尊聖觀音の德太子の化といふ 仁明帝は四官人系親王の標あり

新之山階宮と林次 二代實録日山科宮四而正尹人系親王貞觀元年五月七日出家入道

の同十四年小薨し 仁明帝は四官殿の系親王の標あり

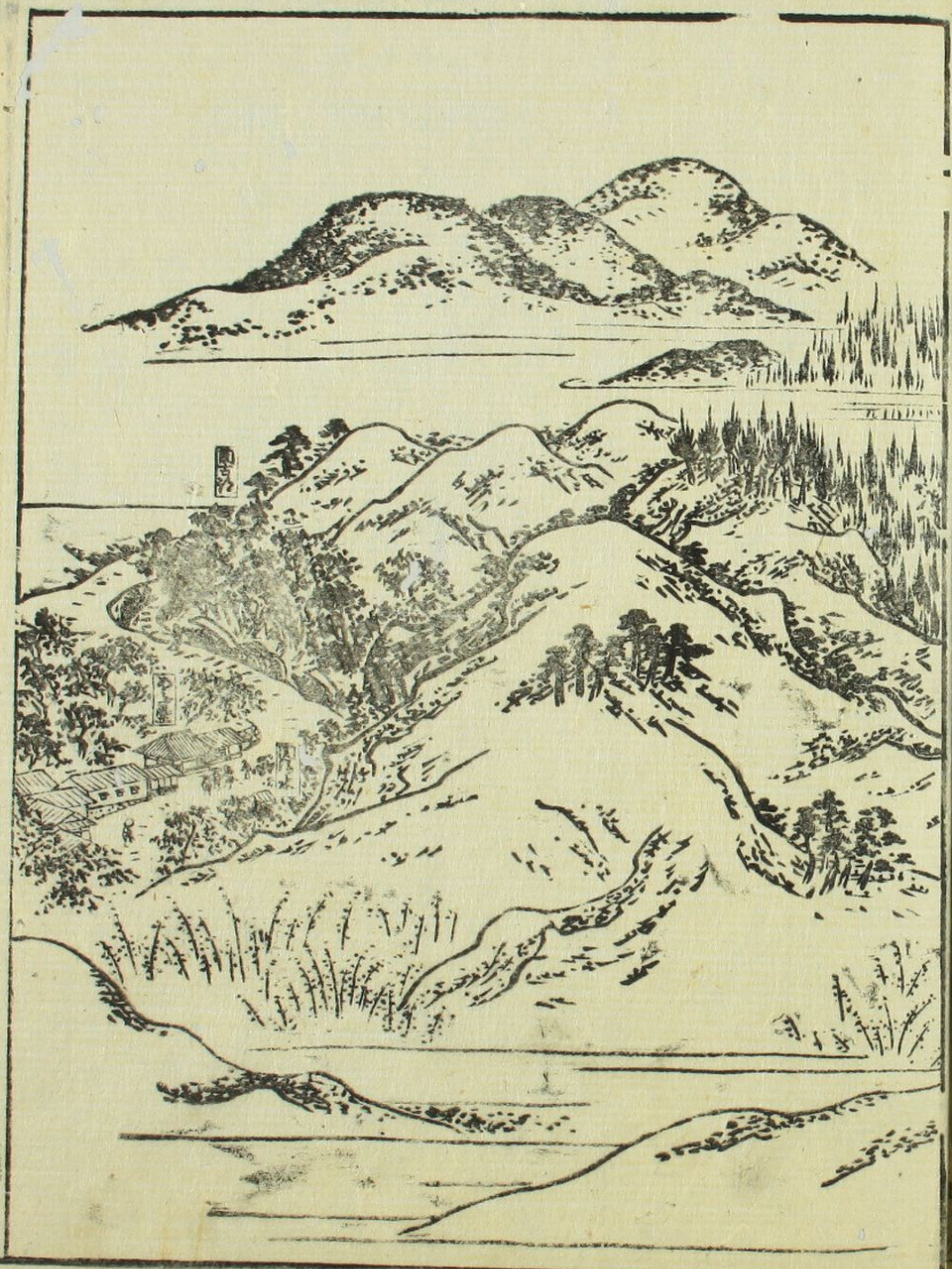
四のみにて
 ありて
 風を
 嘉集
 との
 ま
 の
 小町



小町

小町
 山





遠坂山
明神
九洞



走井

走井の谷町茶店の新築あり、後の山崎あり、走り下り、備出る、年々賑ふと
く、町界ふ、増減なく、車味と、夏日、往來の人、喝と、遠く、の、便、く、た

走井のほやと、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元輝

走坂のかけ樋の水、ふ、か、は、く、る、若、那、の、山、乃、本、葉、く、り、
兼島

走井のかけ樋の旁、た、か、ひ、け、と、の、や、ふ、さ、る、を、月、の、駒、
全

百葉堂 走井の谷の山のふり、観、ふ、百、葉、堂、と、ま、は、州、廬、の、茶、厨、子、
小町、百、葉、の、傍、に、あ、は、な、を、傍、ま、る、右、の、ふ、り、た、ふ、極、丹、丸、
百、葉、堂、の、右、ふ、り、石、橋、の、茶、師、と、ま、は、

益原薬師 百葉堂の右ふり、石橋の茶師とまは、
西、益、原、薬、師、と、ま、は、

遠坂

遠坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

相坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

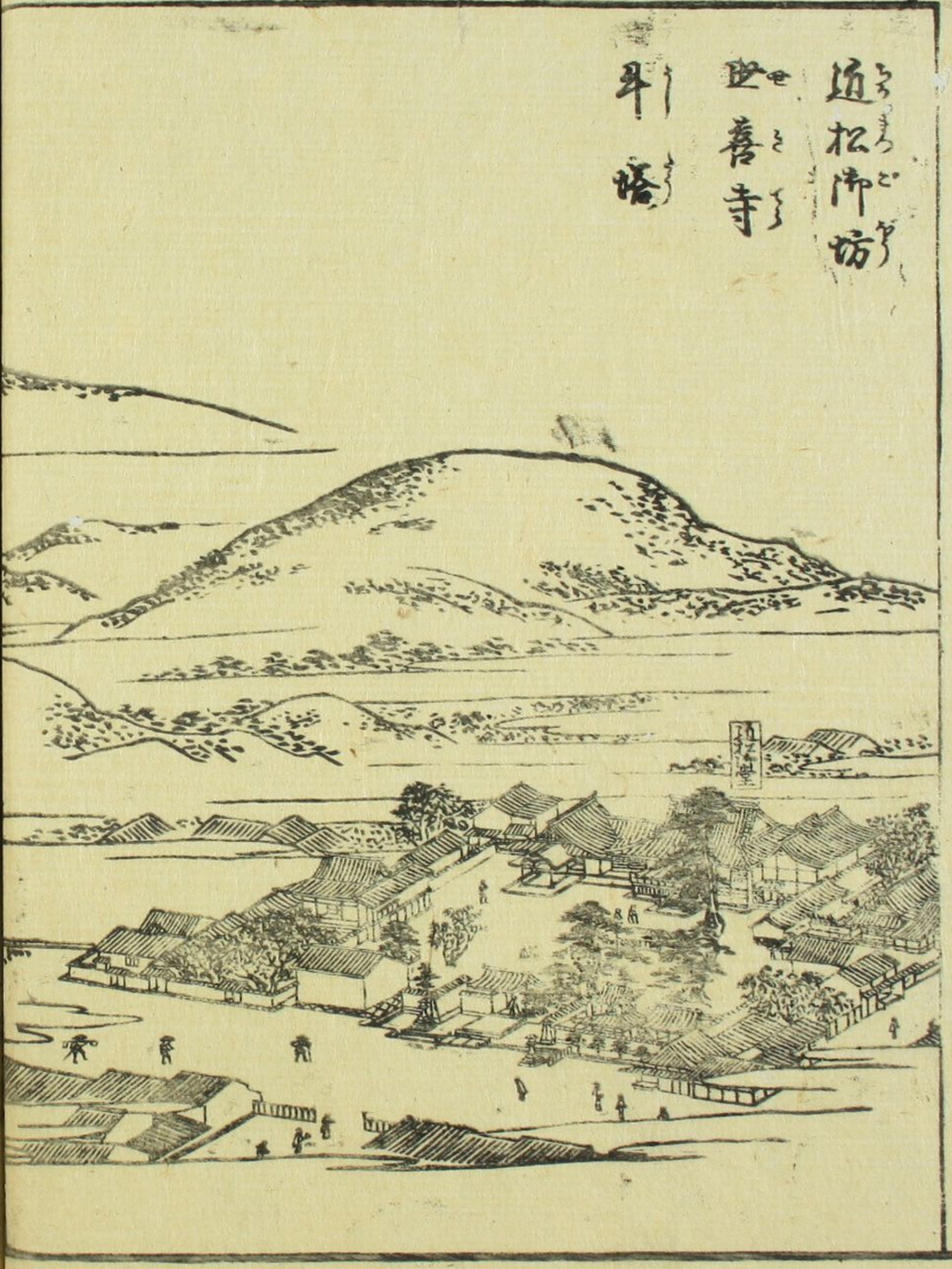
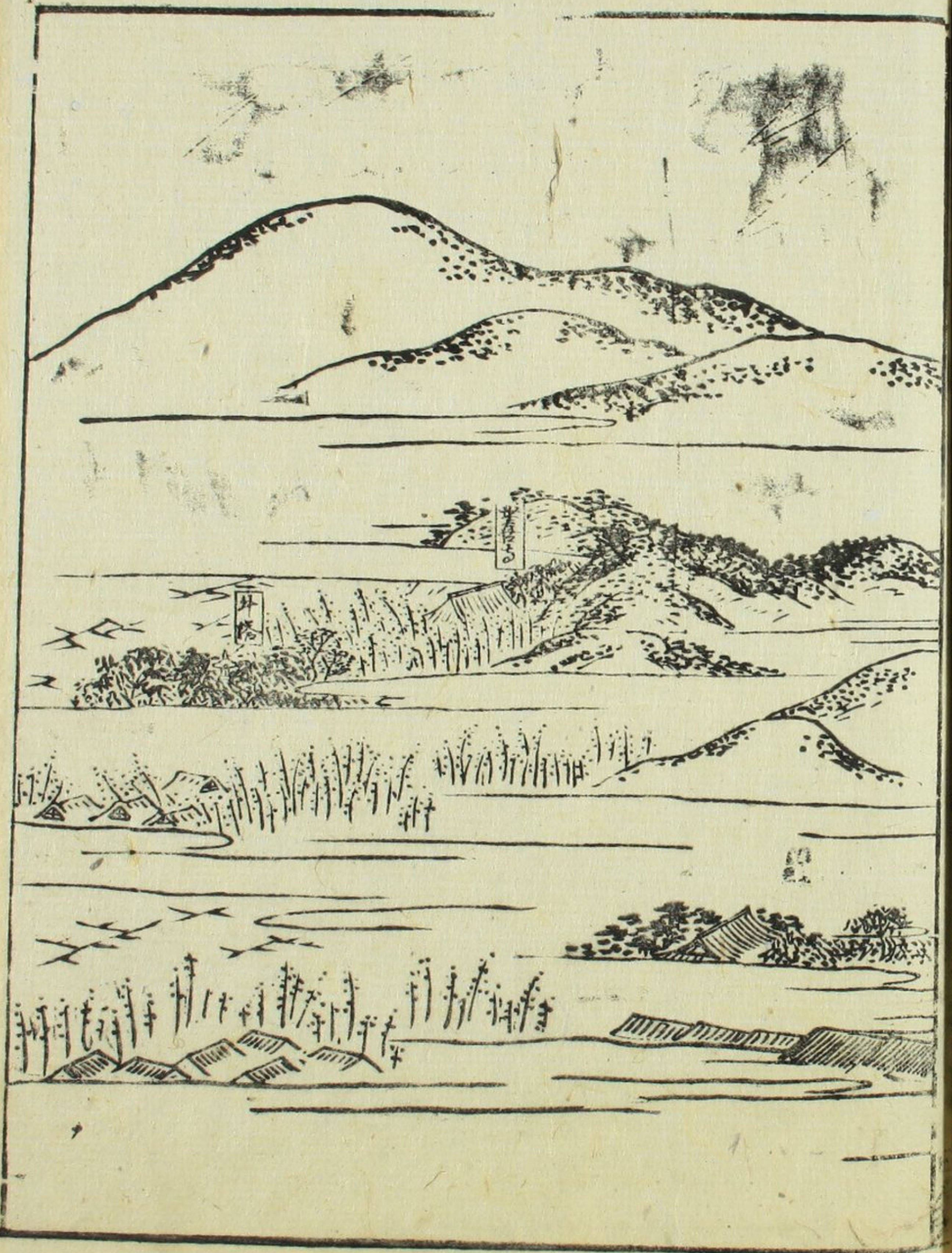
走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方

走坂の園を、あ、る、あ、の、坂、の、園、引、お、ゆ、ゆ、の、け、の、駒、
在来元方



道松佛坊
世喜寺
平塔



大津の屋敷のたれ
 五月の宵の
 源の海一那の
 水打しと諸國の
 の後であつた
 上志賀都大津
 宮あやむいさ
 の遺跡とまゝ
 る

香泉堂

大津

系河より初の驛とされり東に船刺とて坂刺とて又肉東二十八州
三十八州よりあつて七三里大坂あり十四里又津は
滋賀町の南八町といはれ地小坂及び淡海國中の
諸侯の蔵
運び日毎小坂ありと云都一交野成
明和五十六町

我今ほさくあふもん志はれ大津手とる白浪 原人志

秋の日はかろれふのりみち系大津の里れどくく 清和

関越くされもどる大津馬とる一つれれいそくあり 加宗

大津宮

日本紀云 天智天皇紀五年是冬京都之鼠
明已卯遷都干近江是時天下百姓不願遷都諷諫者多
云云
若羽山とて度と入を大津の宮とてま乃花園
大津皇子

さく波や大津の宮小月とみくく今とつれに保る崎中七 賢治

大津皇子 愛せられ長小乃んく文學あり尤文章と愛次詩賦の興大津皇子
日本詩賦の初と云

懷風藻 関衿臨壺沼遊目 女金花澄清苔水深 曉霞峯遠
驚波共絃響 弄鳥興風 開群公 創戴 帰 彰 澤 冥 誰 論

大津皇子

練貫水

練貫水の源は小津の南にあり
練貫水の源は小津の南にあり
練貫水の源は小津の南にあり

長等山

長等山の源は小津の南にあり
長等山の源は小津の南にあり
長等山の源は小津の南にあり

あつたさるさるはふかた浦は尾上とあるさるの浦波 長良良

なせとるさるさるの浦波とあるさるの浦波 長良良

あつたさるさるはふかた浦は尾上とあるさるの浦波 長良良

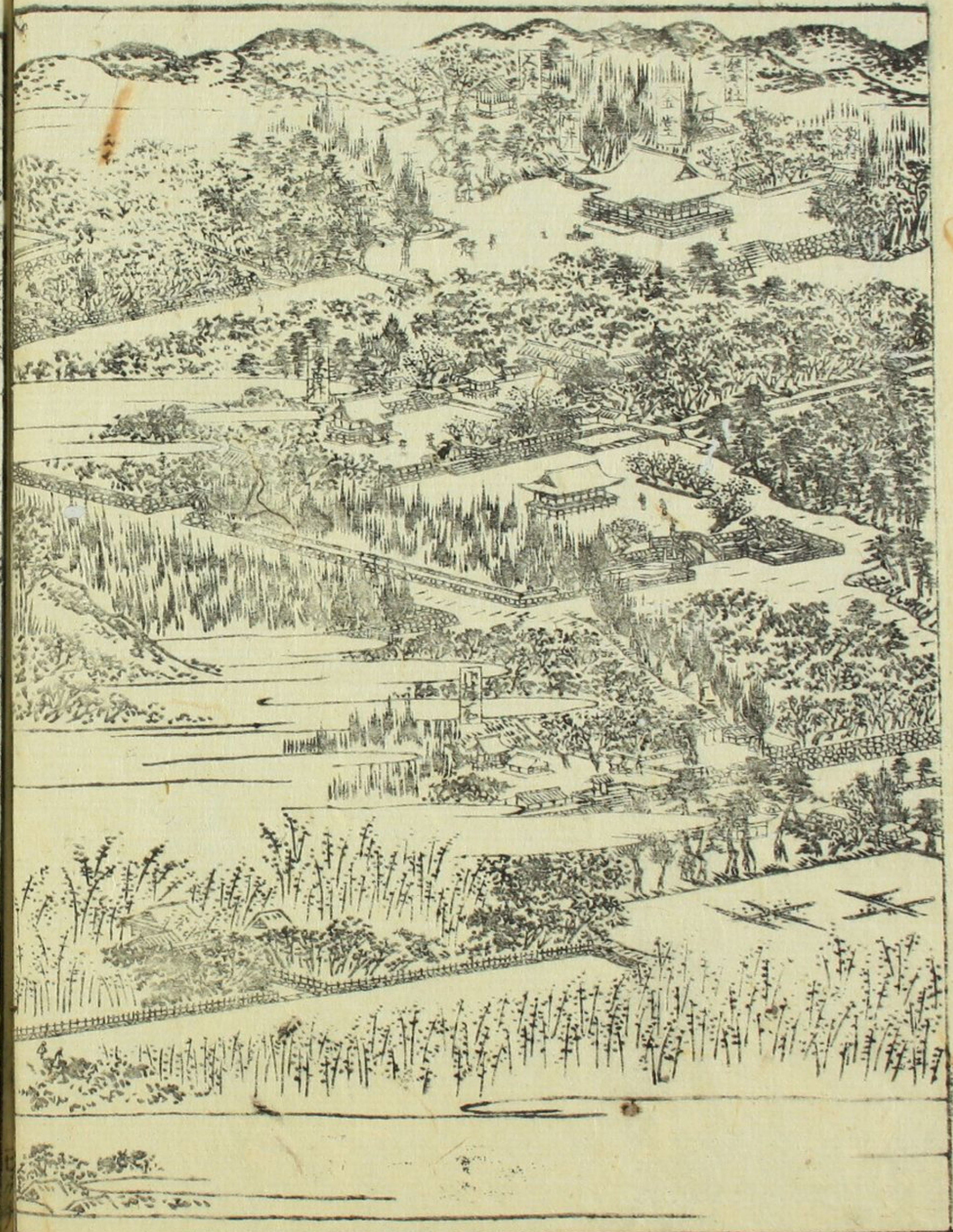
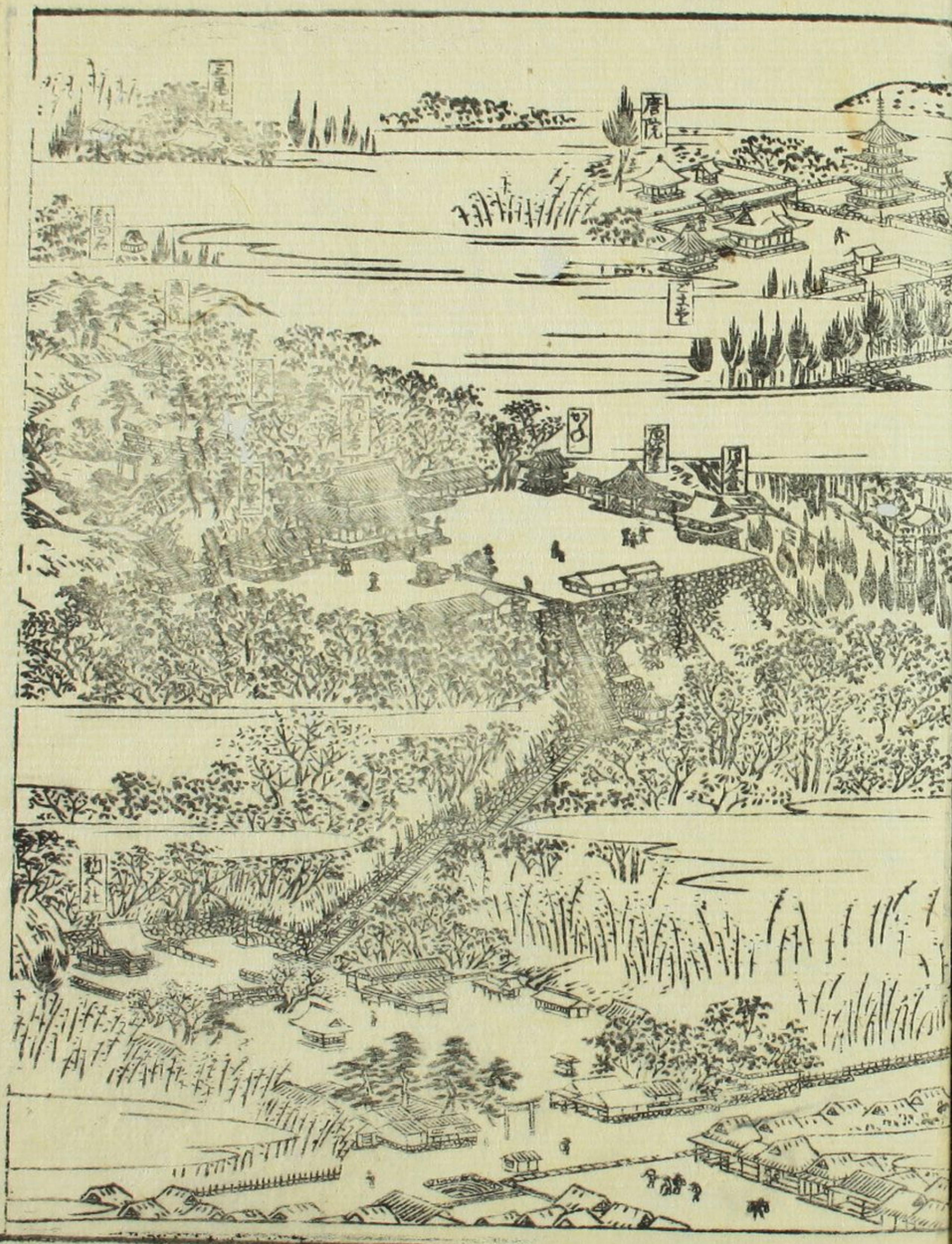
なせとるさるさるの浦波とあるさるの浦波 長良良

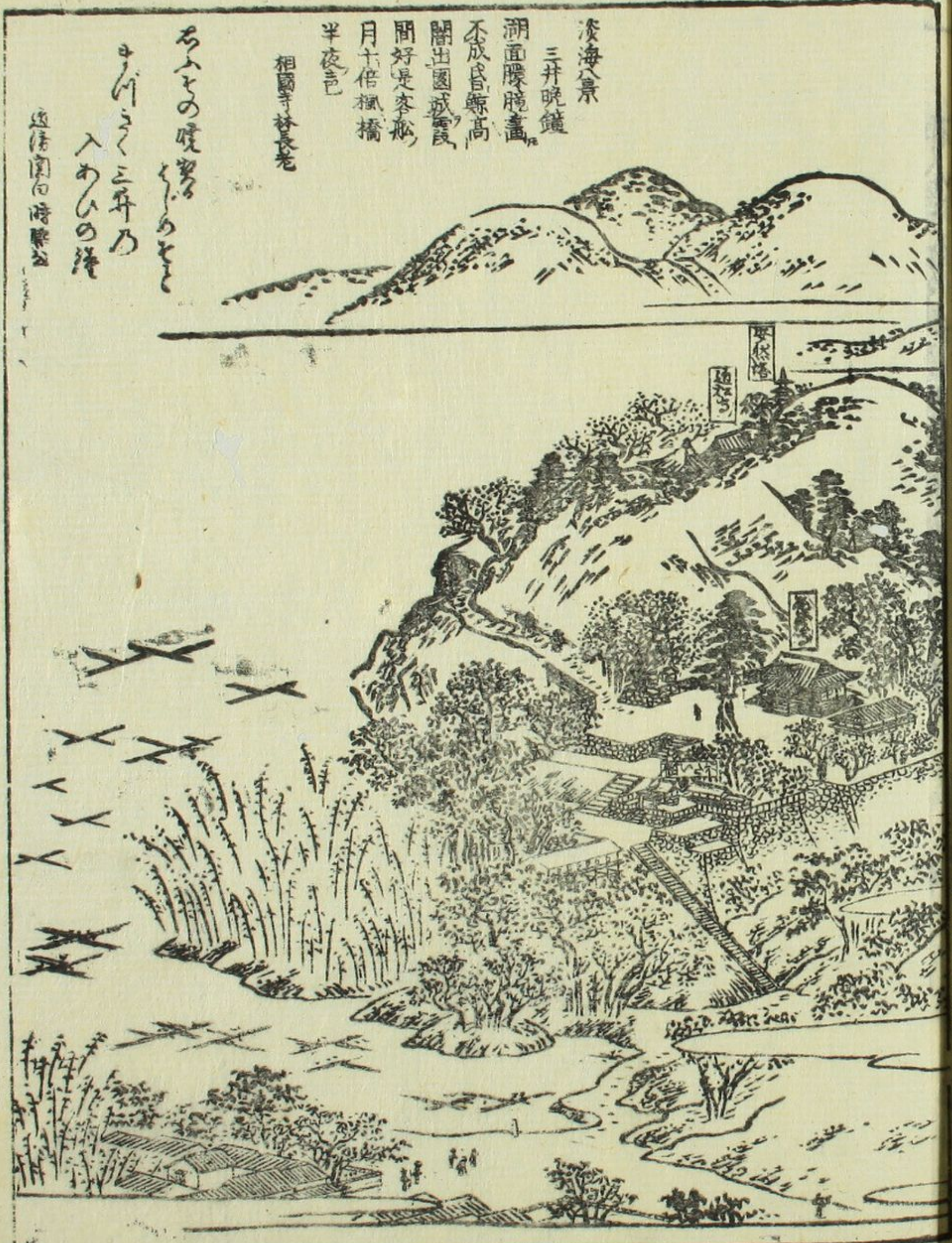
あつたさるさるはふかた浦は尾上とあるさるの浦波 長良良

なせとるさるさるの浦波とあるさるの浦波 長良良

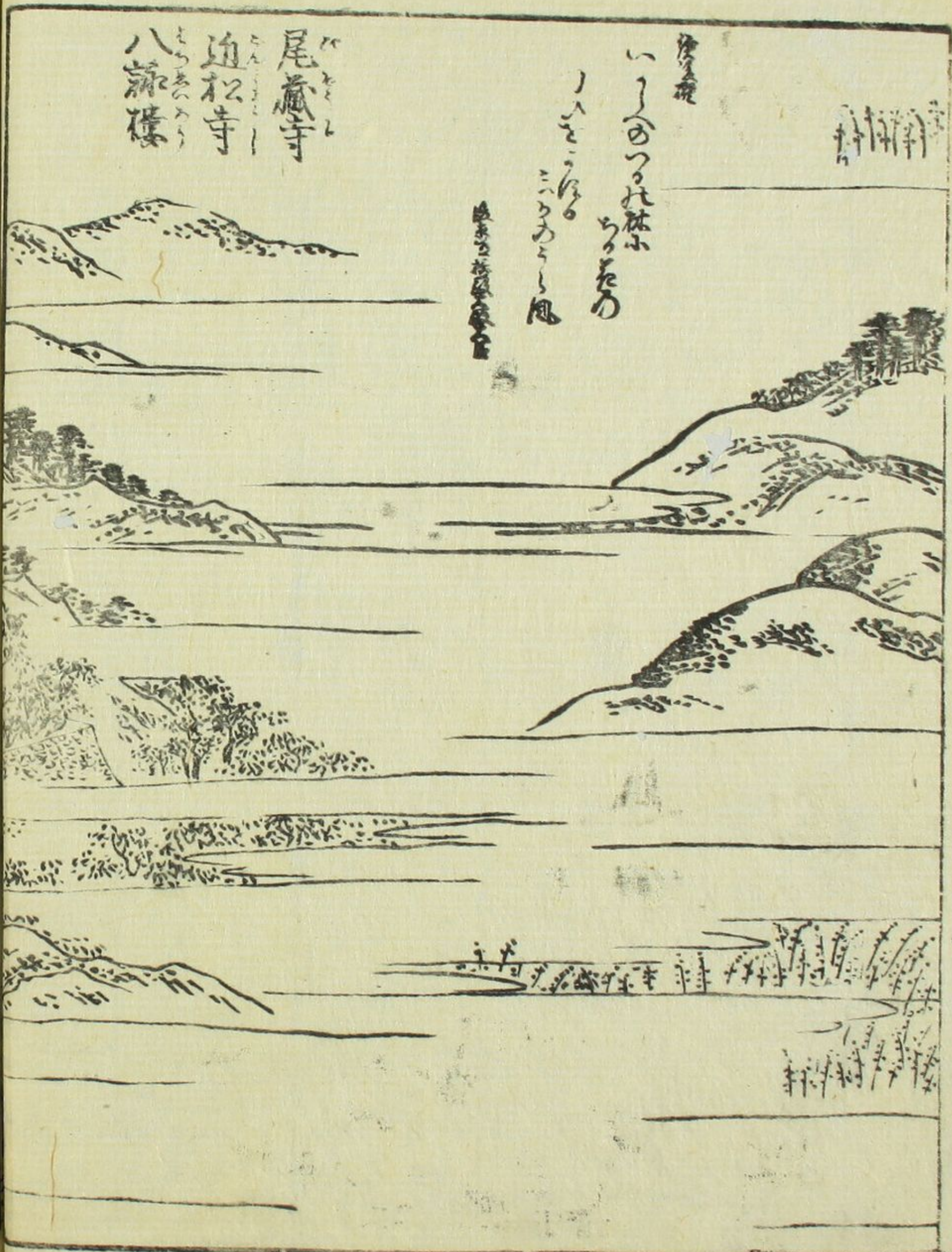
あつたさるさるはふかた浦は尾上とあるさるの浦波 長良良

なせとるさるさるの浦波とあるさるの浦波 長良良





淡海景
 三井晚鐘
 湖面朦朧畫
 不成昏黛高
 關出園城霞
 間好是空松
 月十倍楓橋
 半夜色
 相國寺林長老
 ちよとの暖響
 中川くさくさ乃
 入わいの浅
 遠清園白時集



尾藏寺
 辺松寺
 八詠樓
 淡海
 いっのつらね松
 ちよとの
 一八さくさく
 三つあつらへ
 後集

○圓滿院御殿

寺門境内あり 聖護院宮 圓滿院宮 實相院宮

○安樂行堂

山院蓮華谷あり 地蔵 弥陀 釋迦 三尊安置

○正法寺

南院あり 初ノ聖願寺と稱し 世俗巡禮觀者或ハ

本尊如意輪觀音脇士 右受持 寺門傳記云 後三条院 淨願寺あり 延久
四年の建 後三条帝 淨不緣 月と影のく 平愈 寺あり 大僧都
徳範 宗奉一寺と建 金毛等 射如意輪 觀音係安置
しく 淨願寺 淨願寺 淨願寺 淨願寺 淨願寺 淨願寺 淨願寺 淨願寺 淨願寺 淨願寺

或カ云 正法寺ハ 初ノ南院山上あり 文明九年三月朔日 大衆の瑞雲あり
今ノ地ハ 移次男女の俗人 織姫の居とぞ
福神石 正法寺奥院あり 石塔 塔角石 後石の
大慈閣 正法寺本堂 長の方あり 方ノ間半 慶長十年あり 大建
又中秋の月 賞を 高の佳景と
觀望 寶鏡 雲空 貫くの高閣あり

何來 天地 動 陰 落日 樓 臺 試 一 瞻
秋入 九 江 波 蕩 漾 雲 連 三 越 氣 蕭 森
湘靈 鼓 瑟 思 無 盡 楚 客 行 吟 恨 竟 深
不識 關 門 風 雨 夜 幾 人 標 曲 遇 知 音

○近松寺 正法寺の西の方ハ 願あり 古ハ 近松谷ハ 百二十六房あり
三井五別所の其一あり

○尾藏寺

尾藏寺の北あり 三井五別所の其一ハ 向基 香道 又師中 奥

本尊十一面觀音安置 頭ハ 天朋 伴ハ 昆 以 門 足ハ 大黒 天あり 故
三福觀音と 稱し 又 登 殿 觀 者 とも 呼 ぶ 俗 人 群 衆 あり 定 之
也 あり 傳 云 寛 仁 三 年 十 二 月 廿 二 日 入 定 奉 六 十 五 寺 門 權 願 傳 師 傳 祖 之
尾藏八幡宮 尾藏寺の鎮あり 康平六年 伊孫 源頼義 弟 長 勳 傳 祖 之
源頼朝 あり 故 小 造 官 一 桑 紀 傳

○安然和尚石浮圖 南方山上あり 七層石塔 塔身ハ 五丈院 先 徳 安 然
入寂の地と 傳 山 東 北 高 嶺 之 故 小 水 一 日 和 尚 試 之 獨 結
と 傳 之 岩 頭 穿 洞 懸 瀑 出 ず 車 馬 之 水 一 日 和 尚 試 之 獨 結
と 傳 之 岩 頭 穿 洞 懸 瀑 出 ず 車 馬 之 水 一 日 和 尚 試 之 獨 結

○微妙寺 阿闍梨 心 九十六房あり 今 經 小 五房 存 在

○微妙寺

阿闍梨 心 九十六房あり 今 經 小 五房 存 在

本尊十一面觀音又茶師伴が安次あられむり志實寺の聖伴形り中
志實寺の崇福をなす又如意寺の本尊観音多分あり移次又
北阿不初多坊内に安次あられの智徳大師七度加持の尊容あり
園城寺四方ふは尊像と安次あられ其の中の一解あり
○水觀寺 寺門惣門の下の路のふあり
本尊茶師伴と安次寺門傳記ふ十一面觀音と記次
陶基大僧正明尊

○常在寺 寺門五別石の其一あり
本尊釋迦伴と安次陶基大僧正行尊當寺西山の山上千石岩と云
名巖あり釋迦明神と林成

○早尾明神社 寺在古西ふあり山王中七社の内早尾明神の御傳云
鎮座の其一あり 寺門傳記ふ十一面觀音と記次
不初川とつひまの御水ふ入

○龜岳 寺門内ふありむり 教待仙人方小真體と合し其骸骨極く
形ふあり故ふ人ぬく龜岳と云
寺門傳記ふ十一面觀音と記次

○龜鳴橋 寺門のふあり傳云智徳大師の御傳云今ふあり
形ふあり故ふ人ぬく龜鳴と云
寺門傳記ふ十一面觀音と記次

○村雲橋 寺門のふあり傳云智徳大師の御傳云今ふあり
形ふあり故ふ人ぬく村雲と云
寺門傳記ふ十一面觀音と記次

○夜櫻 寺門のふあり傳云智徳大師の御傳云今ふあり
形ふあり故ふ人ぬく夜櫻と云
寺門傳記ふ十一面觀音と記次

○津明水 寺門のふあり傳云智徳大師の御傳云今ふあり
形ふあり故ふ人ぬく津明と云
寺門傳記ふ十一面觀音と記次

- 筒井喬松 金堂白櫻 新羅夕蟬
- 唐院夜雨 靈窟古鐘 龜塚曉霜
- 琴谷冷螢 護法丹楓 龍池寒月
- 正法眺望

○北院 詩哥教多ありふあり
○中院 寺門のふあり傳云智徳大師の御傳云今ふあり
○南院 寺門のふあり傳云智徳大師の御傳云今ふあり

○智證大師傳記和讃 少納言藤原通憲卿之
歸命頂禮 前入唐 智證大師贈法
清和光孝 乃陽成 乃乃 師贈法
悉達太子 乃乃 乃乃 師贈法
檀特山乃風 傳連 山九朝 乃乃 師贈法
山林苦行 十二年

承和五年冬乃月 嘉祥三春下志 文德天皇宣七年 唐乃大中七年 天台山仁登天 清涼山仁望天 長安洛陽迴津 西唐土師仁遇 良諸和尚開元 法全閣梨乃龍 南嶽天台遺身 石象石橋見渡 顯宗教密學東 自朝他宗波新羅 歸和波皇元餘 清渡乃法門千餘 新時大乃師奏聞 爾六十年行邊 百城寺仁波勅仁 仁壽殿仁波詔牛 金光殿乃齋會仁 清涼殿乃決疑仁 熊野山乃飛來志 八尺乃馬飛來志 權見三所飛來志

大聖明王感見 入唐求法被許 山王渡唐告給 嶺南道着氣里 丈殊乃靈地巡禮 勝地漢語乎窮多 梵乘心蓮花開 一乘智水影灑久 無瓶空修行志 銀地毛修行志 在唐章疏千餘筒 經論乃善神影餘 樵師歸朝弘未利 大勅下利坊建給 勅身入僧正灌頂 生臣入僧正灌頂 宗入僧正灌頂 王法入僧正灌頂 護身法入僧正灌頂 道入僧正灌頂

松施乃幣帛乃妙乃 殿施乃幣帛乃妙乃 尚施乃幣帛乃妙乃 東門松尾大德不限 陽成天皇敬比王明 亭子天皇貴比王明 天合弟五乃座主登志 園城弟二乃貫主仁 一諸切傳論三簡 五尊餘人髮乎剃 王臣道俗歸敬志 千里怪美里波敬志 門弟乃遷化乎遠久見 元載禪師加去志 圓仁入海世志 時仁此等乎開志 後乃日宗人告志 寬平三年冬乃 十平二年九月 其乃音方世界 天寂乃樂雲響 大圓師頭呼擡氣志

神感實仁甚志 醍醐乃妙味乃布乃 詞勝通志憐波 最眼和尚仁令叙 法僧都仁補任 推少僧年戒弘 二僧年戒弘 三僧年戒弘 大僧年戒弘 三僧年戒弘 三僧年戒弘 德世下人戒授 金剛薩埵乃告登 鐘乎鳴天曾悲泣 聲乎舉天曾悲泣 淚乎流天曾悲泣 驚事怪不違信乎 一聖七不違信乎 生年七不違信乎 大聖七不違信乎 善聖七不違信乎 定印聖七不違信乎 三夜印聖七不違信乎 門弟夜印聖七不違信乎

志賀里 三井のふし四村あり 宗匠 西郡正興寺

神よいふ都の月に夜経しくおのひや歩る志うれ古里

橋の花やいひの花おらん香しむくの志うれる里

志賀花園 志賀里 新五郎家

こほや志うの花園をまた首れ人乃を瓜そしそ

あそくろ志賀の花園柿ふた漬く同んま乃ふるさそ

え本守あたこのあふふして昔もそし志うれ花園

志賀山城 志賀里 赤塚より 登王 峠と城 山中里 白川村

白雲の新もつらふろ志うけの岩ほふも嘆花とあそん

桜花乃みえぬまて散ふろいづくいとと志うれ山ま

白ひまる風の使と枝おもく花予城り志うれ山みち

志賀浦 大津の浦より 幸崎及ひ下坂

さく波や志うれ浦風いづさうさうさう海のうちれん

みるりそあまの海いづさう吹きたう人志うれ風

志うの浦やまさうりり波まうり氷て歩る宵明志目

志賀の浦れ松吹風のさひいそ夕波ちとりまお啼也

志のれ浦や対面て渡さうきまに上上の山を半く移

あん坂の山城そそふむとそあふけく志うれ波

昔ある沖の小橋れ菰採果も心たく侍志ののう浪

志賀の海乃白ゆい花の波れ上ふ度とそてう風吹

志賀大楠田 今さうあふだ

ちん人のけれ氷をさうい渡してわさる志の乃大楠田

志賀津 今さうあふだ

さうりあたまの津のめあけいづり舟をさうあふだ

光明寺

祝部成神

定家

春道河

紀秋

瑞成元

法平定

右衛門公任

伊勢守

宗隆

権地良實

源人

法平定

宗隆

権地良實

源人

法平定

宗隆

権地良實

源人

法平定

宗隆

権地良實

源人

續日本紀曰

則崇福寺と稱したるそれより後湖城のわがりぬ神位と稱す
弘仁六年八月乙酉以近江國朝書法一百卷施入崇福寺類聚國史曰

四月幸近江國滋賀縣寄便過崇福寺大僧都永忠護命法師等率

衆僧奉迎於門外 皇帝降輿升堂禮佛更過梵釋寺停輿賦詩

群臣奉和入僧都永忠自煎茶奉御施御被即御船泛湖水國司奉

風俗歌舞五位已上竝據以下賜衣被史生以下郡司已上賜綿有差

延喜式曰 崇福寺傳法會料一萬束修理料五千束

太平記云

むろ志賀寺上人より夢覺彼の聖光ありたり遠小被之奥の火宅

と歩く氷く丸の津利小まんと輕ひく富貴の人と見くも差中の

快樂と多ひ容色の妙あるに至ても違ひのおれ着想と憐ひまを隣乃

柴の店志つとらうと住やふふの柱一巻のねも杖風さく成ふたり

あつ上入茶店の中と立歩くもふ一巻の杖とさく眉小字の箱とたれつ

湖水波志のうろふ向く水想觀と成くゆを海してまき人立のひさる

新小系極の沛息新志賀のた園のまれきと流流とく流流とあつ

々る沛車のおん瓜あがられさるふけ上人沛月瓜人合せまのせくおやん心

まききたまうおらふさふたり遙み沛車のおん瓜見送うて早たれたおん心

ともあつ方もあうたれは柴の店小立席とく本尊小向ひきりたれ観念の

床の上の妄想の化のま立とひく林名の聲れ中みたうのさる大裏のま

けうんる観もあかぐさむるもやと業のまをさむむいをもまうたまひ

閑窓の目ふうきゆけと忘るぬいぬかふうと今生の志念つたぬ離とどら

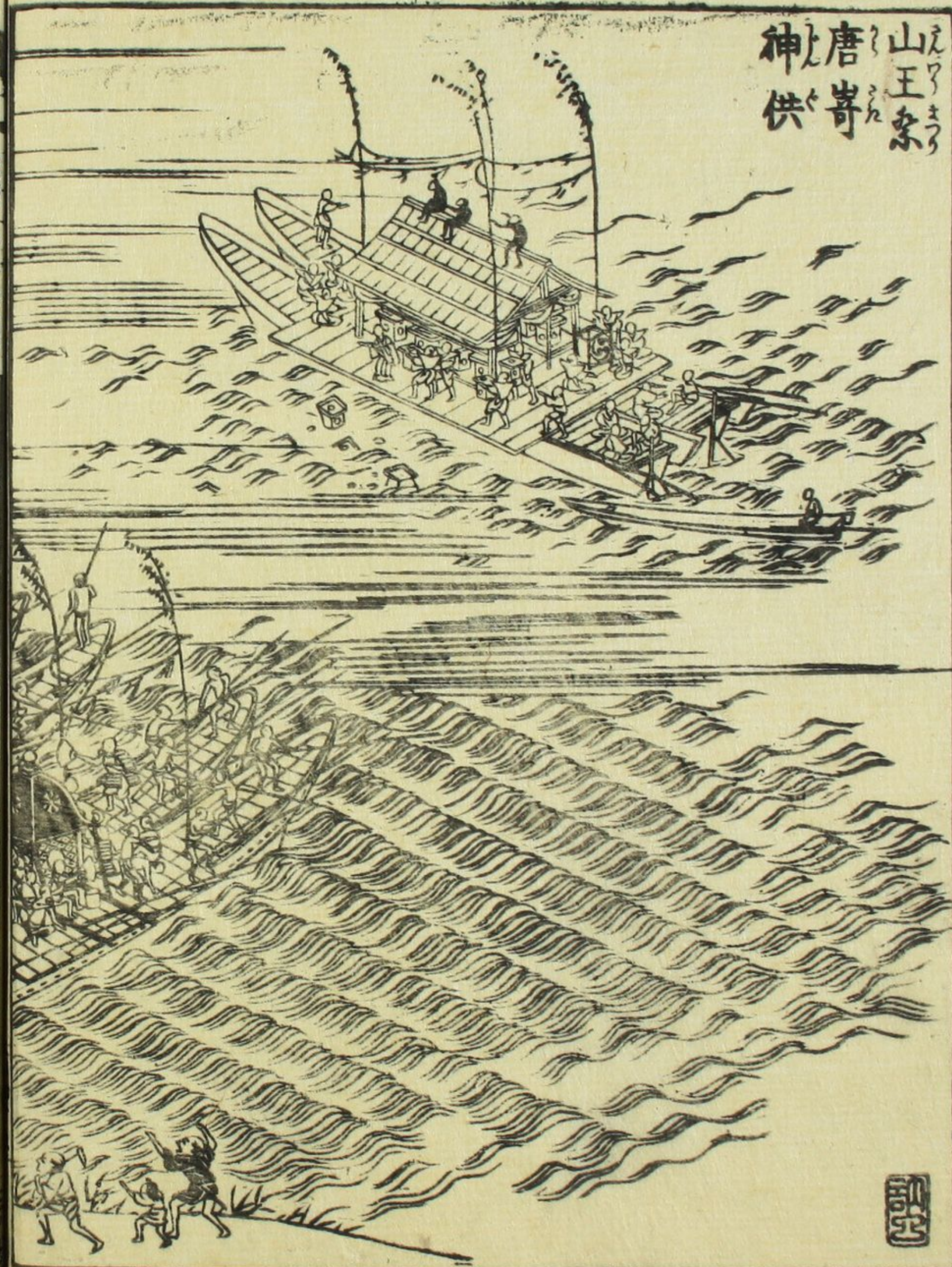
後生の陸や成ぬたれおん心のぬくたさ沛沛息所小一燈すく心をさく

條終とまをさくさひく上人執事小燈の杖とけさかぐと系極の沛息所れ

沛所へまう鞠のつれれやまの本小一日一敷を早うける外の人とれいさ付

候り者まのり人ゆらんとあやむるもさうりたる沛沛息所沛系の

内よりさるる沛沛息せれと是といふは志賀のた見のまらさる月と



唐崎神祠

奉寄のねの下にあり日吉山王の所蔵なり

祭神海少童命

日吉の社伊勢國守所 毎兼六月晦日夏祭。樹小遠近群衆を率ずり

はいたる尊とよふていふまじきものまのりてされ

所後と信らうとすたふらひ細と神のうけとるなり 平治年

あくふとそまうとく諸さく舟も今ふらわ素とわゆ

山王例系ハ四月中申日申別ふ至る七社の神徳又官より下ハ八柳

より船より一敷小漕つれ奉修のねれを湖上ふ双ぶ藤所より

奉る神供船と名樂と奏し七人の奉る儀の形と真如仕傍ハ蒲経

神供 粟の飯と 湖上小散り之宮一社の神供ハ神徳ハ眞社人白幣茶茶

一袋とほへ船より船一勝日吉の社人へ渡り放る神式お湖へ神供船

より相慶の太鼓と撃は七社の神徳又一敷小漕つて若宮の渡り還所より

まは神系と観んと多系師活花及び遠近の貴賤あふ聚り湖上

五六船と渡り家々の紋の幕ふ喜成りぐり一陸より渡り松風小漕り

聲今様の声樂を流の若櫓柏子の若の系ハ官用船諸侯廟の船

湖上ふ足く船中翻籠くく流海舟一の賑ひあり早振神の

りぐみ色芝のねふまぐひ齋都の余波今もありくひくあぐれ

風色ぬる魚一

久々の天は日吉神すの月月のつらも光りくたり

唐寄

一ツ松 奉修の候は社嶽小あり 諸云むり 樹松若極盛

開水一蔵も瓜葉出れは奉 古来より 早三ノ宮ふ遠人其若の

一様さくありありあり 又ハ松の葉れ向く 一葉あるものあり

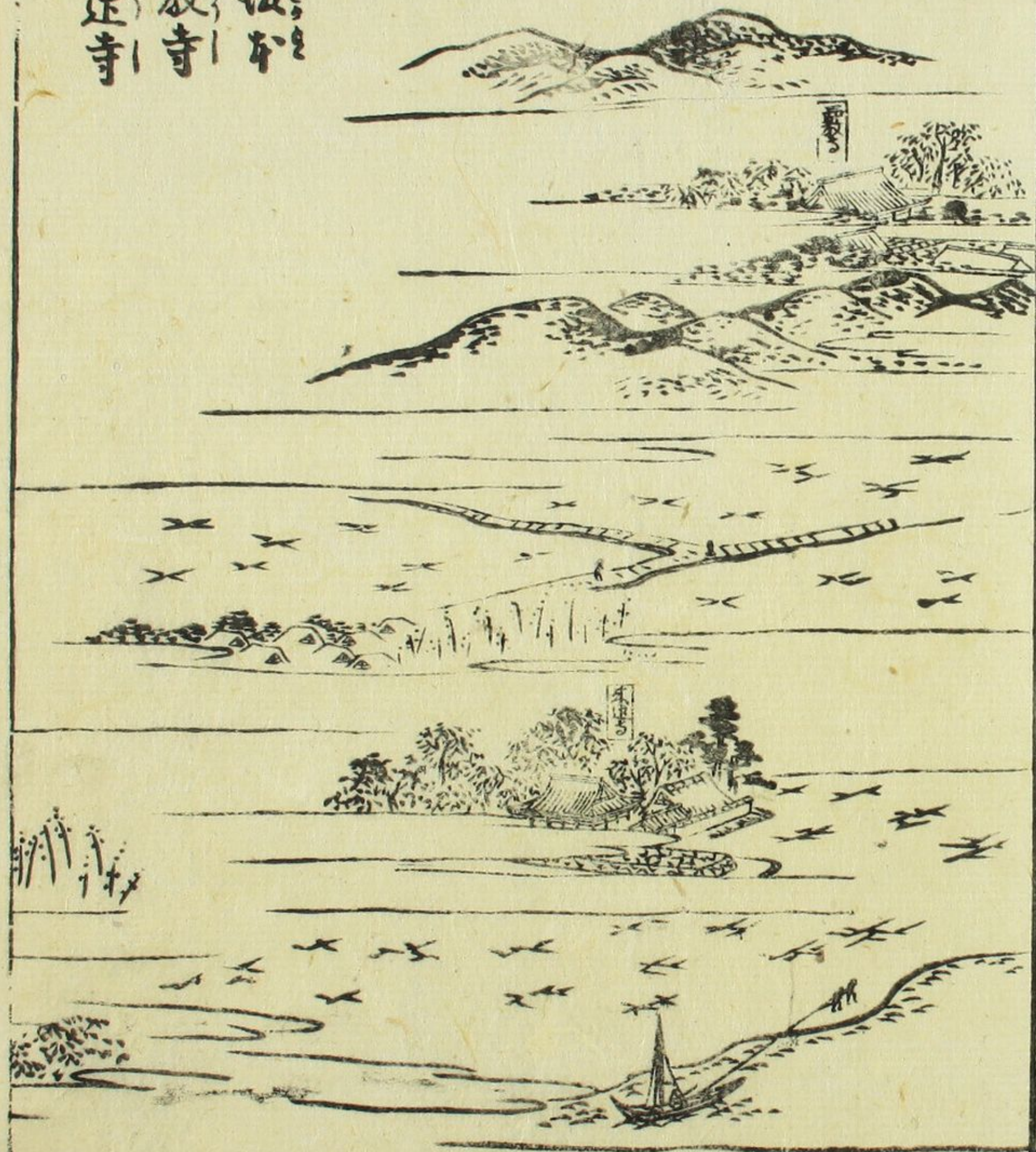
あつたやちとふ見ゆる真如地ふはう入色あた一本の松

縁され神のみゆたのいみいそを遠とつらもこら屋

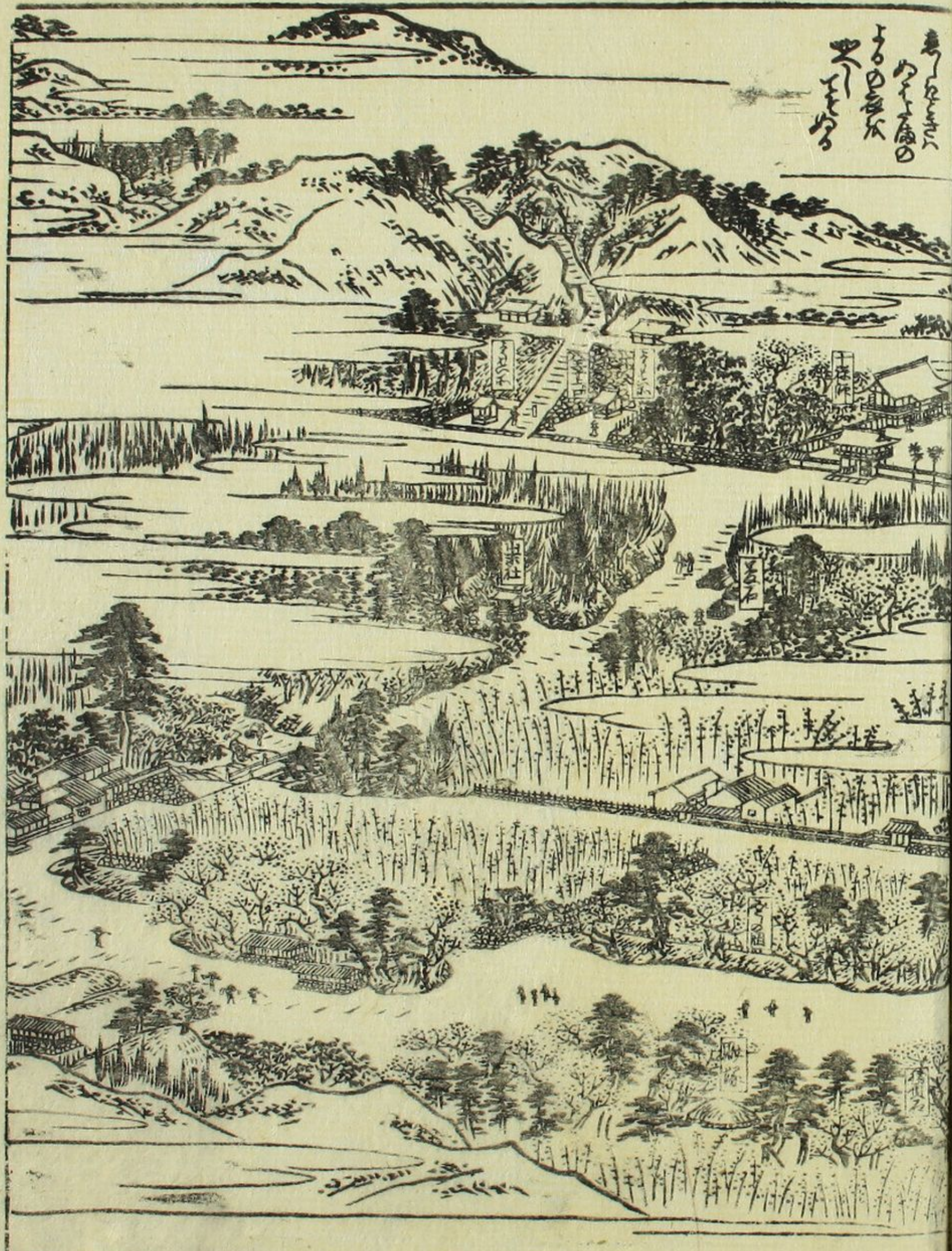
それ奉寄の霊松ハ株の圍五尋高之丈符教子の枝葉四方ハ葉り

あつら社頭ハ靡とあつ湖上ハ秀遠く眺む華磨のみく近く視とむ

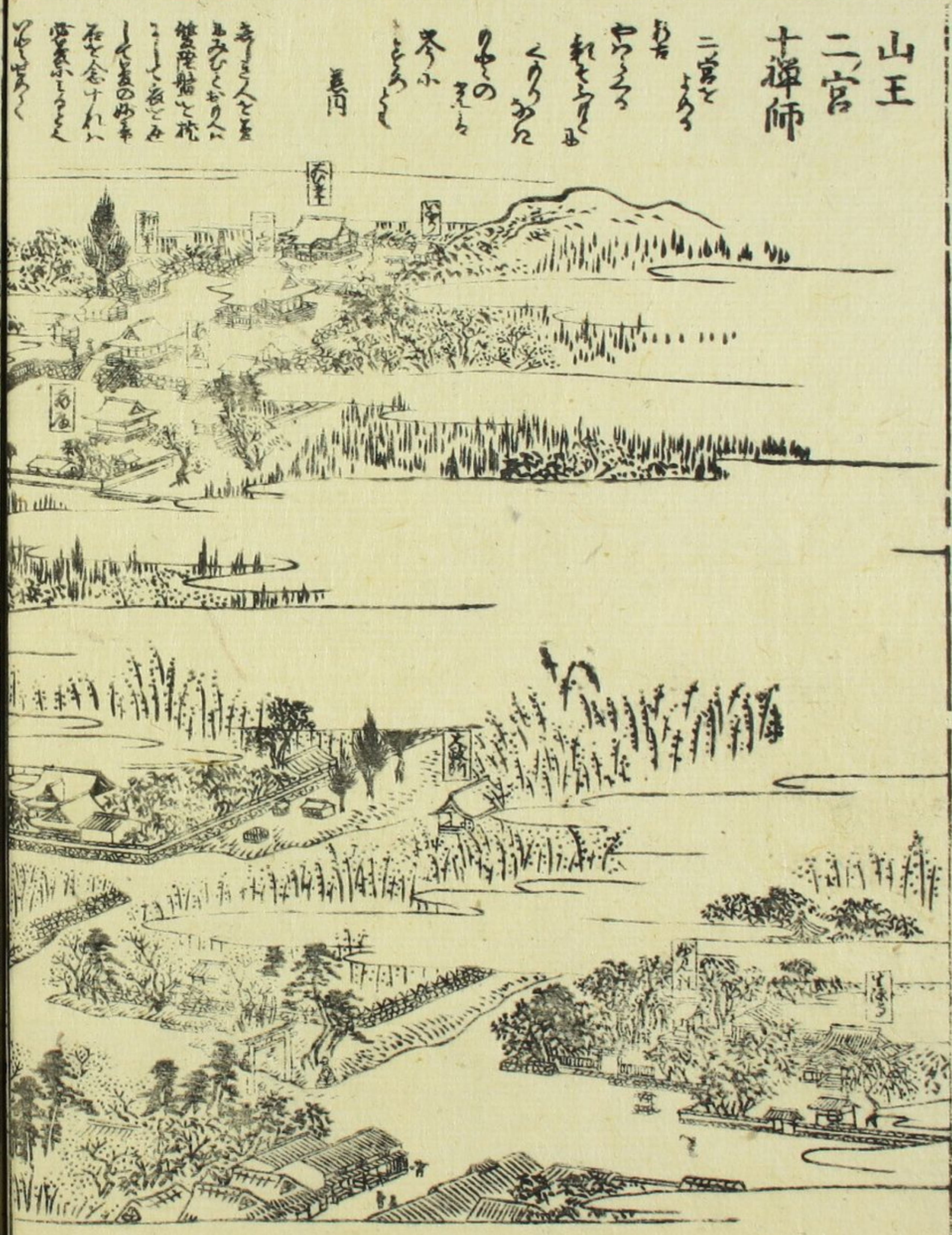
東坂
西教寺
朱達寺



晴龍小加ら四時蒼々や一ふる君子の標瓜成り霜雪は凌ぐふ葉成
 庸とて湖照る朝日ゆけら松の葉ありにゆを渡浦より風の夕にこれ
 秋とて色も水も一まの庭よりく麗々たる小沖の船ちいさく夏の月
 凍したる悠々たる波の若琴の若初わたりわたり秋の夜はけり
 曙みかいた松の葉素あををくされをふ葉と厚きを其積る牛と成その
 實と嚼(を)長生衣得る脂に地中沈く茯苓と成又龍骨とある青州の
 貢丁固が爰始皇の五太夫小封ト玄蚌の俾路とある一む本朝も住吉
 高砂曾根武隈の名松ありくくも古松養一ありて又實二にありて
 ものか一ゆは雲樹の落ふややうふくあのみやうと得るもふあは
 めでぬふたたえ一あやあらん
 龍上 狐、松、翠、凌、雲、心、本、明、餘、根、野、厚、地、
 貞、質、指、高、天、弱、枝、興、高、州、茂、葉、司、柱、榮、
 孫、楚、高、貞、節、隱、居、脱、笠、輕、
 内裏清涼殿紙形
 志の浦や松瓜わりの吹く雪をく水も氷も
 大納言重定
 中臣朝臣



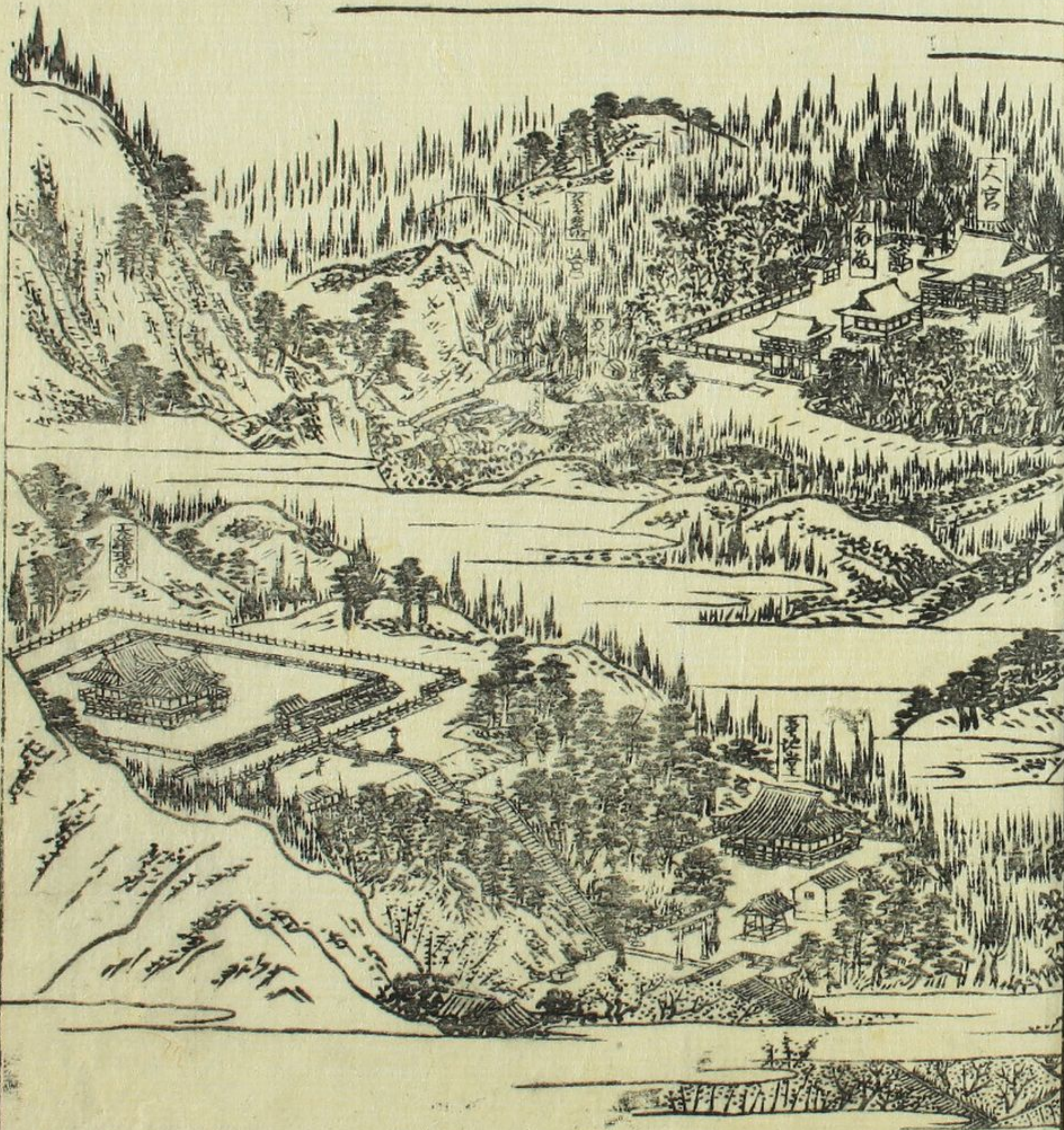
寺
 の
 名
 記
 録



山王
 二宮
 十禪師

二宮と
 山王
 十禪師
 の
 名
 記
 録

日吉山王
大宮
聖眞子
客人宮
八王子
三ノ宮



本地堂 本尊河津院佛慈大尊
の化洛東直如堂の本尊
と同化同

橋樹 二株神木ありけ
神の故と表す

杉社 聖女祠は神の表樂成
中より其家の表樂成
信樂一龍殿 氣比祠

客入宮 延喜元年六月十八日
白山昭林と称す

祭神伊弉諾尊 本地十一面觀
世若り

影向石 延喜元年六月十八日
早二天祭は白山推現

杉社 神宮
杉社 林齋祠

十禪師宮 二宮は本あり
延喜二年鎮座

祭神天瓊々杵尊 本地
地蔵菩薩

夢妙幢石 二宮橋門のあり
敏喜天とあり

杉社 岩瀧祠 聖王子祠 山末祠 下王子
祠 二宮の馬場あり

船石 二宮の杉林の中あり 下の
八王子 杉向石

明星水 下八王子の末
林中あり

八王子宮 八王子山あり
崇神天皇 神位元年

祭神國枝植尊 鎮座
大法王子也本地

三宮 八王子山あり 延喜二年
鎮座

祭神惶根尊 本地 聖賢成記云
三貴女 民嶽

金岩 八王子山あり 杉社
美津若

中七社 牛師子大行幸 早尾 氣比
下八王子 王子宮 聖女

下七社 小禪師 聖王子 新行幸 岩瀧
山末 劍宮 龍殿

法橋惟舟
あまのり
二首の
富士の名



貞室
あまのり
あまのり
あまのり



まね
あまのり
あまのり
あまのり



常春
あまのり
あまのり
あまのり



素堂
あまのり
あまのり
あまのり



芭蕉翁
あまのり
あまのり
あまのり



信徳
あまのり
あまのり
あまのり



具角
あまのり
あまのり
あまのり



一晶
あまのり
あまのり
あまのり



都水
あまのり
あまのり
あまのり



海辺
あまのり
あまのり
あまのり



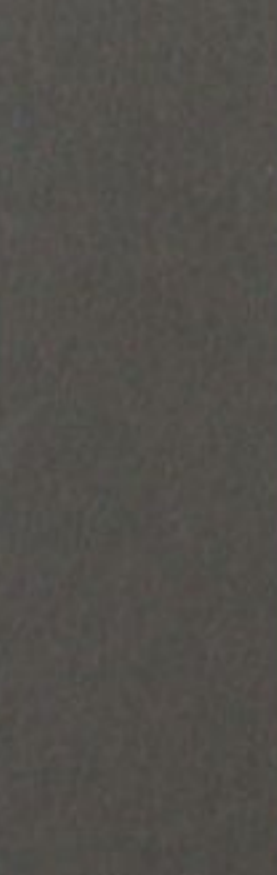
立南
あまのり
あまのり
あまのり



正式
あまのり
あまのり
あまのり



梅盛
あまのり
あまのり
あまのり



西結
あまのり
あまのり
あまのり



已上山王二十一社あり本比ハ本堂院
 産靈命神花ふり川く喜 彦主
 巡情の隠あはれ祖山王一實
 神道ニ兼取一の義山家ふり川く
 まじりて

○大権現 淨宮 眞葛原の
 上ふあり

瀨佛堂 淨宮の中殿ふあり
 本尊茶師め来

金鼓 寛永三年 丙寅十二月と鶴と
 銘文畧に

○桓武天皇御廟 眞葛原の
 東ふあり

○慈眼大師廟 帝陵下殿の東ふあり
 南光崎ら 位巖
 戒壇堂の傍ふあり

後古 重真子宮ふりみてもりける
 やつらる光へてあしり一の酒のま井村秋のよ乃月
 口 客人の又ふきりける
 實ふ又光瓜ふりやとけうか然の白紙や君乃ふる里
 後拾 客人の社ふりたのちうらふみくうら
 いふ一の紙海おけくく山嶽今もらるる君と清け
 新干 客人の符規と
 かくお瓜ふりむもふりたけわれ初一君乃ふる山



種少侍部
自仙

後集後拾

後入る

茶之徳道主

龍の山有明の月いりうらとく我立松のふりやみきとむ
 芝草社山王七の淨屋一の所神巍然やして鎮座ありまた中ふも
 大宮二宮八日枝の山嶽神代より天降る六合の本柱と
 天子奉命の道場朝敵降伏の神威平天下の所獲あり君みんを波や
 丹後なる湖止觀とた一後の嶽をさる君みん一念三千の嶽を破し陽
 向ひ陰小せむけ社頭森々くく山のとつうかりく溪の流とたく
 神祠くのたを備ひ他も異みくく正一社玲瓏とる實ふ神秀の氣は
 ありまゝ新淡海一州の畫窟一畫少の回峯の山傍橋笠とまのけてや
 くとりがう大連の阿闍梨に洛中の神社をせも巡あしてゆき人の
 小結縁一日毎ふ多くの道落瓜苦竹一や一車尊くあつてくく
 おはゆる神代まんのあはれみか清淨ありて正直と考とけけゆえ
 を修くの罪咎か一地祚の末ふりうらう君民思とらふ清く根の
 國小を儒とる因茲神と現下併と居るこふ界裡みかわ光の塵と同日

意圖

两部習合し一々も亦尊しひうりやう本比と仰と一密跡と神とさる
浮屠氏のあひ願くは本比と神あり一密跡と仰とさる我神國の本柱
の初まの験なるを

日吉神詠告傳教大師 羅山子神社考出

阿良之毛 左牟志 登布比 登茂奈志

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

いさ日吉社同社のうららのふたまうりく子日しと

あひふりひく日吉のそとそとのある七の星乃照高志

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

あまのりやうのひの子日比小松おひん末すてさうひしと成

○直葛原 権現山の下旗馬場とて一真葛原の意鎮岩水小至まうりさの勢成後世襲あり一旧跡之洛刺の
拾王 亦意い松とて一のそのめりて海之たふ来小風さくわり 意用

○四ツ屋若宮 下坂本多の若宮あり

○登町若宮 下坂本多の若宮あり

○奥成宮 下坂本多の若宮あり

○比敷辻 下坂本多の若宮あり

○石占井 上坂本多の若宮あり

○大馬居 上坂本多の若宮あり

○妙見祠 上坂本多の若宮あり

○三津百枝祠 上坂本多の若宮あり

○和産和行係 上坂本多の若宮あり

○大政所宿院 上坂本多の若宮あり

○大政所宿院 上坂本多の若宮あり

○大政所宿院 上坂本多の若宮あり

○南若宮 上坂本多の若宮あり

○同社 上坂本多の若宮あり

○磯成宮 上坂本多の若宮あり

○若宮 上坂本多の若宮あり

○同祠 上坂本多の若宮あり

○生源寺 上坂本多の若宮あり

○大將軍祠 上坂本多の若宮あり

○小五月會周 上坂本多の若宮あり

○歡喜石 上坂本多の若宮あり

○歡喜石 上坂本多の若宮あり

○歡喜石 上坂本多の若宮あり

○歡喜石 上坂本多の若宮あり

○歡喜石 上坂本多の若宮あり

のち殿(遷幸)七社と合せある

○王子宮 大政所のあふあり

○嵐洞 王子宮のあふあり

○彼岸所 大政所のあふあり

○早尾洞 野尾のあふあり

○走井宮 走井のあふあり

○塔下惣社 塔下のあふあり

○八柳 八柳のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

○神路山 神路山のあふあり

七社下七社合々山王社一社と一社八十七社本末都て一八八社と

公事根源云日吉系中申日神跡に洛西松尾の社と同跡ありて之

吹神あり 後朱雀帝長之四年六月八日小を先く社二社の内小なる後三条院

所宇延久二年四月廿日小を先く日吉社傳成考ふる白鳳二年

天武天皇即位二年社傳あり 上巳日小大津宮八柳浦小山王神あり

湖上二艘の渾舟あり 今田中恒世を人々晴光といふ其時山王権現

示して日吉等といふ事 松の下小を先く二人の者ありて渾舟

渾舟の神あり 又山王位小日我小齊忌の神供とて一恒世對云

渾舟好むあり 美楊の小舟の中小栗飯あり 汚穢あり 後神供

つとく覆盒子の栗飯盛くあり 瓜俵入山王喜悅斜あり 後恒世

渾舟小棹あり 韓崎孤松の下小到る権現又示して日吉系

栗飯の神供懇小思入海子孫永く毒菜四月中申日小松蔭小神

形より栗飯と神供とてと云終く神路山波止土濃ののち還を

申入是より神系小恒例とて古實を云い先の申のあ末乃日

○靈石 王子宮のあふあり

○地藏堂 地藏のあふあり

○走井大師堂 走井のあふあり

○猿塚 猿塚のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

○神路山 神路山のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

○神路山 神路山のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

○神路山 神路山のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

○神路山 神路山のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

○神路山 神路山のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

○神路山 神路山のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

○神路山 神路山のあふあり

○神宮 神宮のあふあり

○輕子宮 輕子のあふあり

八王子に宮二社の神楽と八王子のの殿より為る神楽昇殿十人由
みくろけは坂坂成場とる勢ひ猛りて死生を辨にあらと神楽
とてせれりて大政所ふ二宮十禪師八王子に宮の四ツの神楽と遷し一箇乃
刻ふ系師より神供と献る晩小入く獅子翁田楽あり初更の段に相圖
ありて四社の神楽の轍と一箇小落しをれを一教小お後と奉へて走れ
あら瓜又宵宮落しとて一箇洞のありてお後の侍員と極め大宮を殿
小入する申の當日より山門の八衆に横杖輔に罹り坂下の衆徒公人と
甲曹公落しとて社頭へり照に其時より極威と奉ひ神式お人の非礼に
紀と案ふあれは官幣の勅使奉樂の遺風と奉る積安のありて獅子
翁田楽あり神々々神主代の見恒世奉子鬼令餓子に東帯ありて大津
馬場村より出る七社の神楽申の刻ふ神をあり惣合より小趨き奉夫の
ぬし潮石を居りてお後の勝負と極む神楽のありて飛ぶぬく小走りく
ハッ柳の漢小到る諸人あれ見んとて横所と極む田圃の畔と走り又腰

刀とつげ飯前成擔く走るとありておの案れ風小誘りて七社の神楽
ハッ柳より奉船ありて奉寄所被所小到るありて恒例の神供成献る
祭式畢しとて漕度一比較にのり官の漢へ着居りて奉社一還奉か
ありてあれとあせんて遠近の貴賤馬場小群集と茶店も多く延と及て休
所と設けお人小店成ありて種々と帶入酒賣餅賣引豆落し水
囊入过的をれり照の次第に郡系の中と賣ありて旅舎の商人の度安乃
狭き恨と笠と脱る者へ警固の指成帯備之山王系へ故實ありてふ
多く一と押二月申日より始り近郷近近七浦みかひ系祀に櫻を積ふ
七年観ざれをてく見はくやう奉茶果久遠お及ておひめり
加程の百實今の世をて残る系祀掃ありて土遠境の人も生涯一な
観ぞんをのてくみかされ活平安民の行事なり
千載つ
かこの日吉の教の奥の案れ戸をておけりやら
り終るとお賀成と日吉とありてお同くお月の神とてとる
全 巻圖

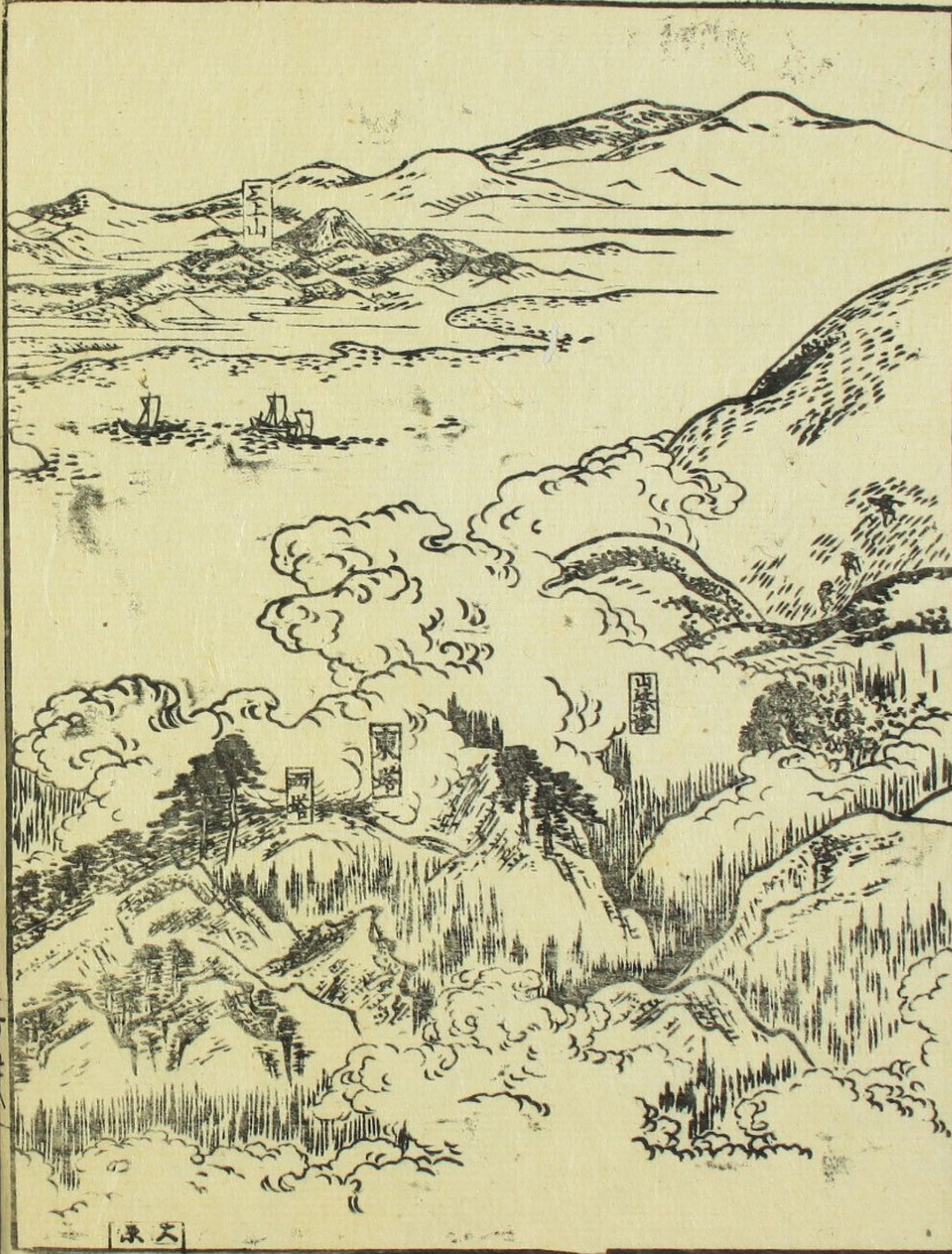


山王祭の御月中申日
身く坂本法師の八人を
古家伝礼し馬場通の
ひ烈莊觀之と云々
圖とん身
然るに
五に僅十
一とありけ
の

印

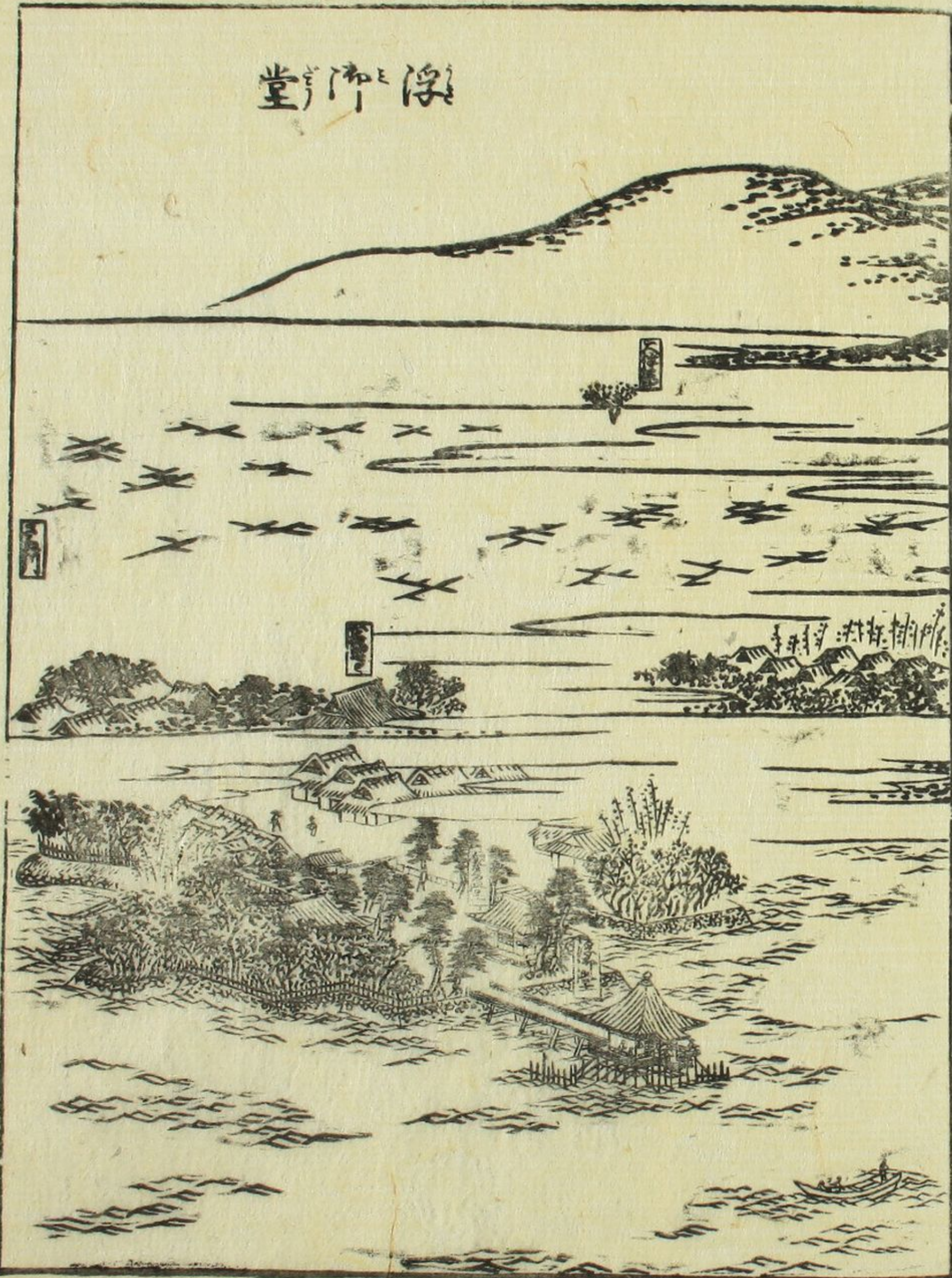


四明嶽上落乳龍
 丹鳳城の瑞嘉濃
 不極見涼然
 青天濯出
 五里芙蓉
 秋林齋



東天

浮世堂



堅田浦

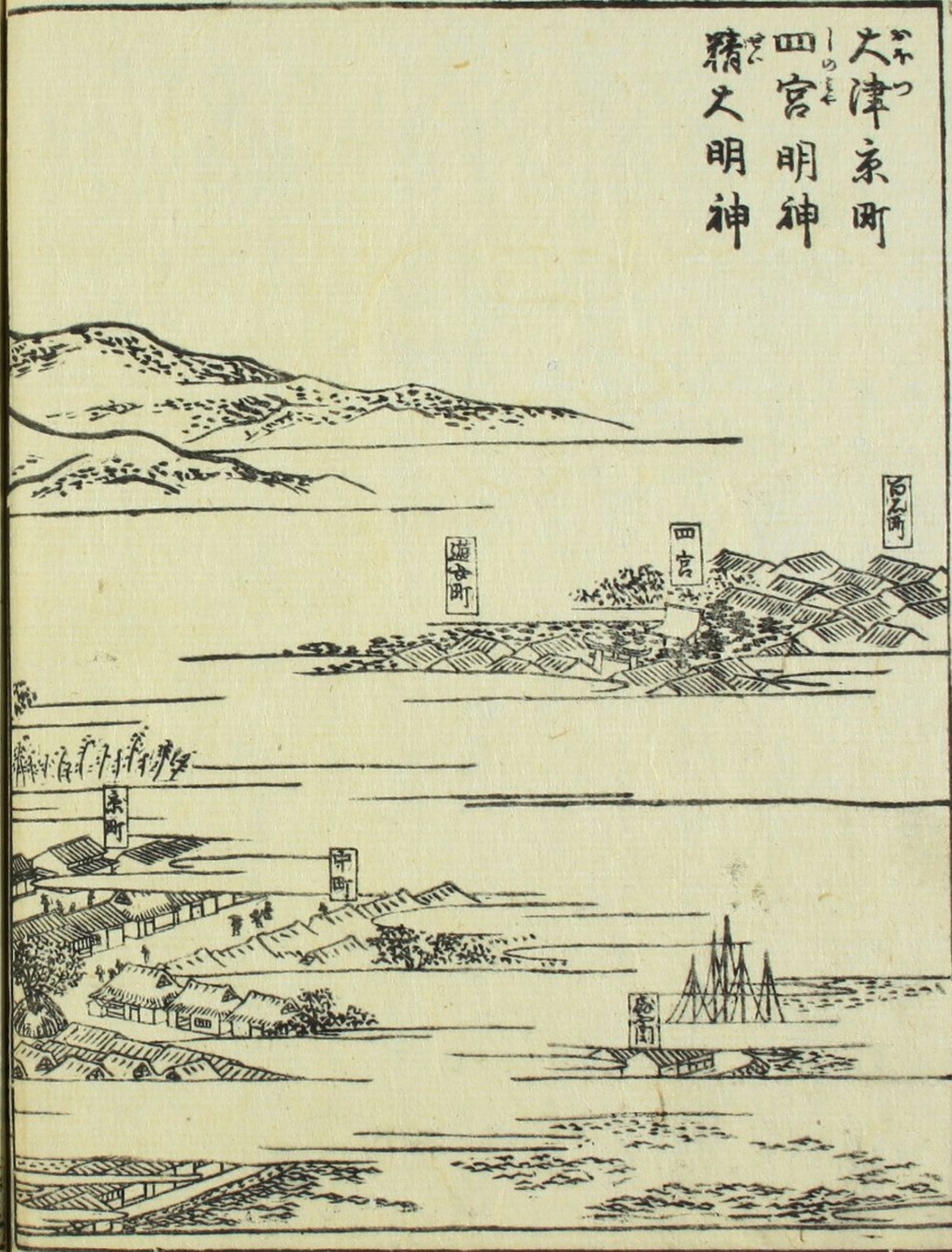
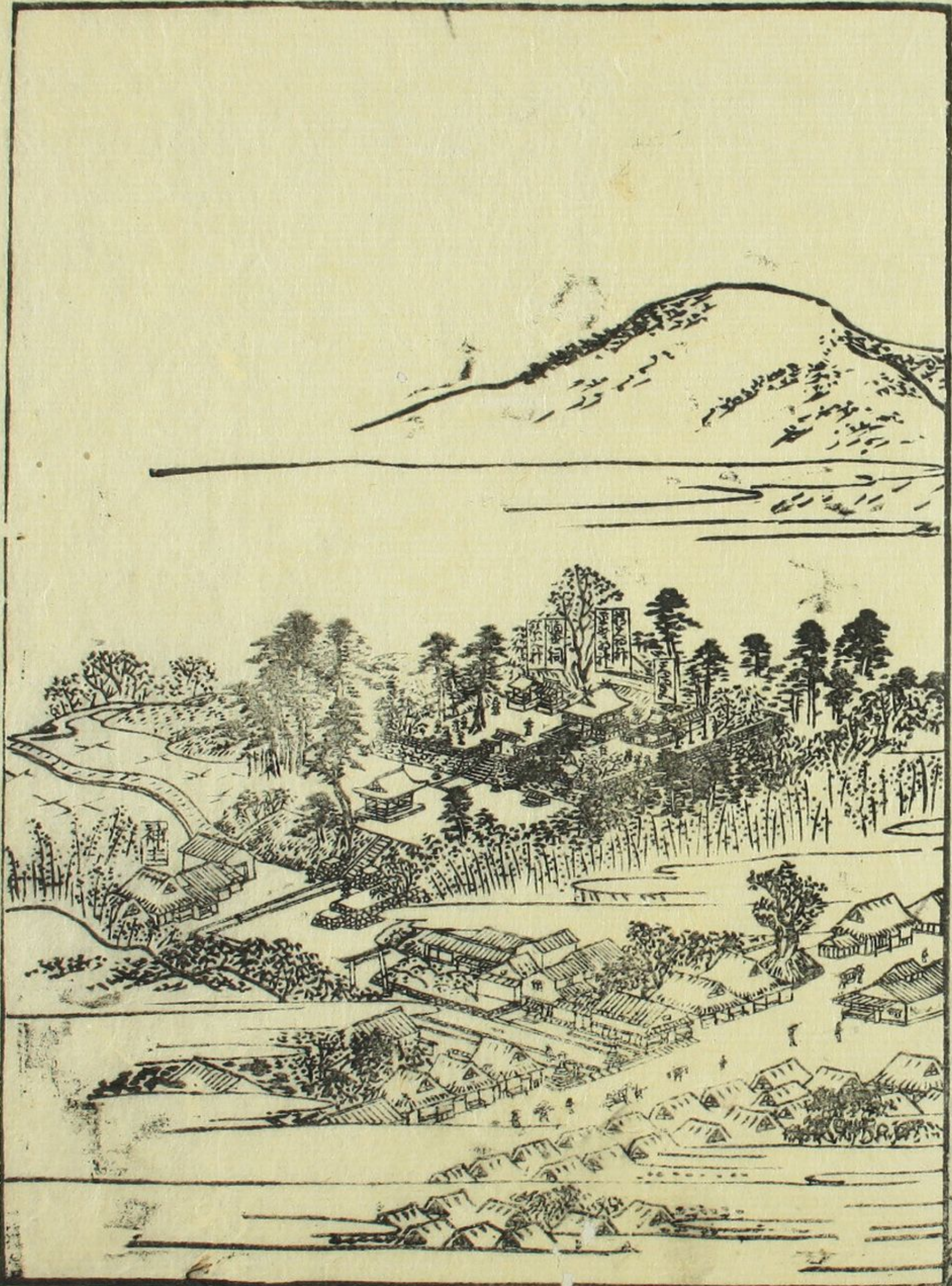
鏡の夕
月半の夕
浮世堂
とん

四明嶽

此嶽山の通稱也山王社より北に十町許に八日花社の日ハ女人と許し七
は社名傳を傳とせしめられし中堂を二十町四明嶽ハ中堂より八町
許に石標あり日枝の嶺上ハ樹木一樹しかハ根盤の石を礎とし
十餘年あり日枝の嶺上ハ樹木一樹しかハ根盤の石を礎とし
其務は樹の根盤の石を礎とし東の方ハ三四町ハ石を礎とし
あり是山城近江の國嶽とあり五町半ハ石を礎とし四町の
廟あり四方派の玉座あり中堂あり中堂あり中堂あり
中堂あり中堂あり中堂あり中堂あり中堂あり中堂あり

夫四明嶽ハ山州ハ一の高嶺あり山水清暉と倉千里小園と極むまの
西南ハ帝城の巍然と居ハ鴨川ハ井の二流愛宕高雄の連峯去端
ハ淀川の流長と遠く眺むれば難波津の金城其西ハ滄海洋々
とと帆の舟ハ昆虫の森ハ如く東南の岨下ハ唐壽の孤松大津
浦粟津の城野多の長橋心の方ハ琵琶湖の樂々悠々として山水の美
あにぞ傳る邈小ニ上の翠密比良騰吹の雙峰黛色添く湖上ハ仲の橋
竹生傳も浪の上ハ今ハ海津の船ハ田夫橋のついで舟ハ水雲ハ
中に鮮ハ會稽山の記ハ四明の高嶺去ハ秋と書し同日の論ハ峻

も四明をれを四明の名あり秋の日去消ハ天外蒼々たる時をハ駿河乃
富士山ハ峯より見ゆるハ百富士といハ青糸師の愛宕山より富士峯見
ゆるの圖あり日枝の嶺ハかきくハ鮮ありハ良嶽ハ岨下ハ
大抵二十里の湖水乃低と深と其より東の方ハ尾尾之遠四州の向ハ高山
ハ遠の秋葉ハ長嶺ありハ高峯ありハ蒼天ありハ山嶺ありハ山
疑ありハ傳聞ハ弘建武の乱ありハ皇居ありハ講堂の供饗ハ
榊葉ハ夜々ハ元龜ハ信長の暴連時世ハ愛宕ハ煙塵ハ雲ハ人物ハ
政事ハ風流改ハ折鞍の富士ハ三國の名山ありハ頂嶺ハ登る時ハ
勝麗とて去と歩と去ハ入るが如ハ遼東北の方海陸のついでありハ
只旭の出るハ外ハ一我立松ハ帝都の繁華琵琶湖ハ
ハ系ハ山中の客とわくハ城江二州の延勝とてハ良嶽といハ
良ハ根ありハ堅ハ又封の名ハ丑寅の方剛一陽未復の後丑ハ黎寅ハ
演ハ東方孟陬の辰あり故ハ王城の鬼門と漢ハ惡魔ハ移ハ



大津系所
四宮明神
精大明神

打出濱

系解よりを返すか類く初く湖水へ打出る後瓜りり

今この松本の濱口よりありて
上下界
うづ波はひまわく岩ありて之はさうくいきをもみよる
大伴黒主

白波の海氷さうく白波の打出は淡みま風をふく
保兼氏

約多く打出の淡と見渡を初日とさうく志のうづ波
後吉野院

圓城く打出の淡は志の先ふりうと志の智のふ
吾相

白浪のうづの淡は秋音ふ多にわたりし鳴るを啼
志達

四宮大明神社

系神素戔出見尊
地神素戔四宮ありて
大國主命
大伴黒主

又坂本山王系は社より
神代衣冠
神代衣冠

又坂本山王系は社より
神代衣冠
神代衣冠

又坂本山王系は社より
神代衣冠
神代衣冠

又坂本山王系は社より
神代衣冠
神代衣冠

又坂本山王系は社より
神代衣冠
神代衣冠

精大明神社

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

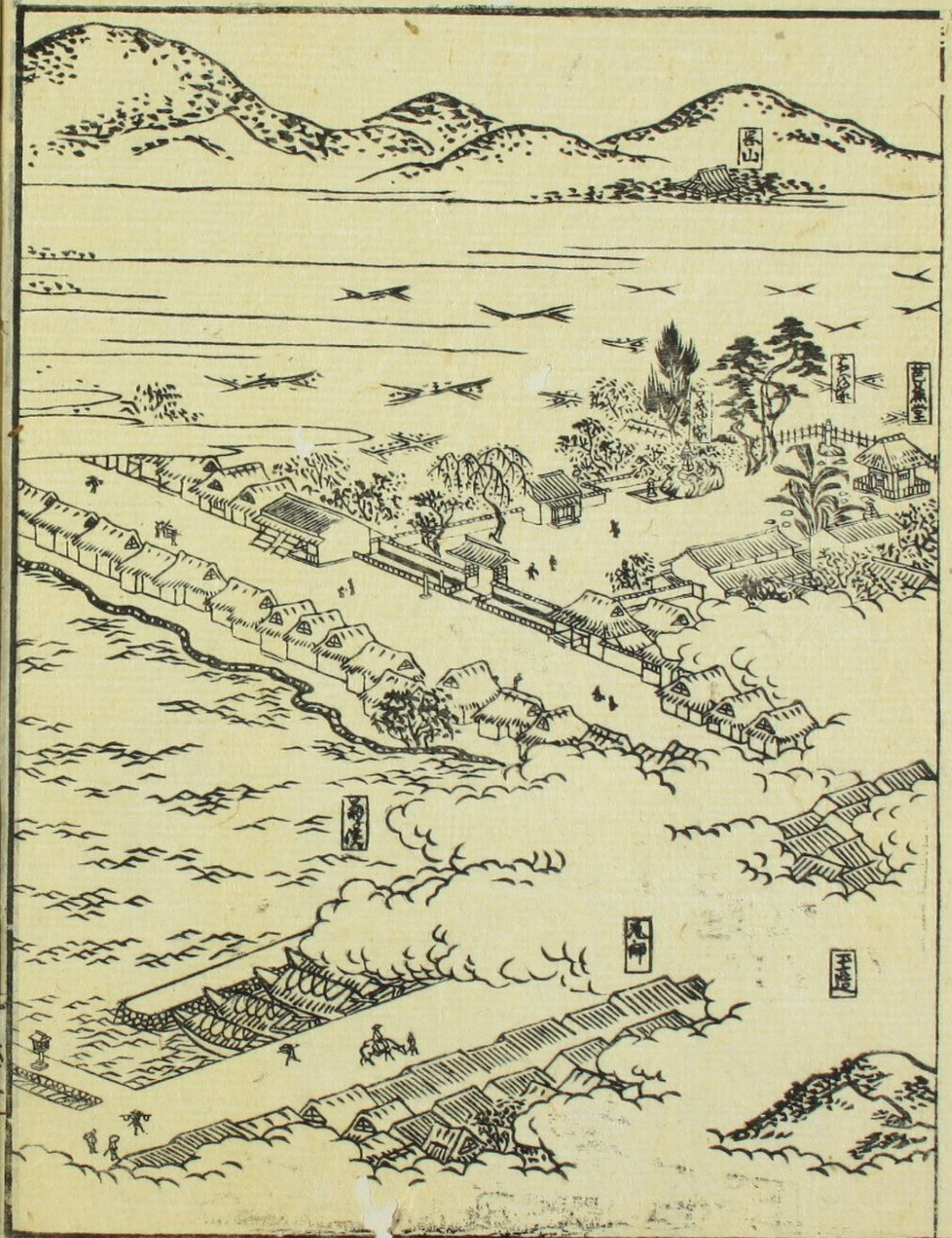
祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

祭神
相殿仁徳天皇
社傳云當社精大明神ハ

やとあふる娘よねとまの風

太極

松本波口場
義仲寺
芭蕉塚



義仲寺

馬場村のありし所本曾義仲殿の世に佛堂小單あり

義仲墳

堂名小あり或記云天文廿二年近江國司依高頼石山寺

の中小塾に長成小建人々英雄義武紀より本曾冠者と稱次頼朝と

八月武州小能く悪源太義平の二策少く孤と成乳まの家小依て信州岐廻

豆州より義兵と興小及んて義仲も亦兵を發し信州と平げ上野も

十方と帥く攻秋入義仲ハ羽丹生の八幡宮小放く太土坊覺明小願書

と書せり収り破浪俱利迦羅と名攻落し平軍死る者七万人

義仲捕小多く都小攻宅平家小幼主と護りて西海小趨く義仲

推と居し左馬頭小任せられて執後國と賜り朝日將軍と名素侍

院宣と下されしを發あはれし驕奢日小長ト公卿小関官

一土民と流毒一上皇と逐内裏小焚暴逆多うりしを録倉より

範頼義経討より一義仲を字治勢あてりて執ひし義仲乃

軍敗是野田と堅一兼平小出淡とひりめ小孩を養く又執ひし遠小

主従二騎小討さるれ兼平原の源田小馬と乘入獲極とと小石田小太帝

宿小夫小中く執先し中平家小悟小く入り

芭蕉翁墳 義仲寺境内義仲殿小隣り又其室にとき芭蕉の居たと安

枯尾を出辭せ 義仲殿の病を治すに枯尾の功あり

西國の脚に執りて一又坂小治り船場小堂を築き其意ハ一兼平翁

年五十一門人其角丈州正秀去來と初十架小築成り

道年寶曆十年の元系下下三十三人の秀分と養りて其門

室子の血脈の流れを記し其功あり

其功あり

其功あり

其功あり

其功あり

志賀の石門の水をせよ

芭蕉堂の澤無の石門の水をせよ... 芭蕉堂の澤無の石門の水をせよ... 芭蕉堂の澤無の石門の水をせよ...

大系や水の出く者入勝月

赤本と銀のふけー根打止

勝所

勝所 城のり本田度領... 西の口和所と云く宮ノ宮町の右八八龍王の廟あり...

湖水交易の船着みかおん征して其るおん應り寶鏡とて神供料

とらおん十分一といひ起て原系ふくく湖を二二人乃総甲あり... 名取近江粟津佐森陽焔といふ今も人日吉近江佐粟津恒世とて...

栗津松原

名所のありふ
つれづれに
波のせきは
ゆきんか
史跡園の時照公



栗津晴嵐
嵐度栗津春興
長次霞吹雨似
桐柱山花片々
一帯波湖上開
鶴屋也香
相國寺林長光



本曾四天王
隨一之軍將
今并四郎原正
更澤原血戰



春泉

落膳濱

落膳濱の濱... 櫻裏へ鮮魚を日次...

粟津野

粟津野... 又粟津小野又粟津野の末の古跡多し...

粟津杜

粟津杜... 昭新の城... 昭新の村の杜と云ふ...

粟津里

粟津里... 昭新の庄に村里と云ふ...

東海

東海... 東海の中は...

粟津

粟津... 粟津の村...

粟津

粟津... 粟津の村...

兼平墳

兼平墳... 兼平の墓...

東鑑

東鑑... 東鑑の記...

壽永三年

壽永三年... 正月廿日...

今井四郎兼平

今井四郎兼平... 兼平の事...

兼平

兼平... 兼平の事...

洛入

洛入... 洛入の事...

且喜

且喜... 且喜の事...

弑死ころすの心を兼あ平らも防弑ぼうしの秘盡ひじんく太刀たちの切先きりさきと曰いわ小舎こやと馬うまより逆さかみ薩さつく
自戮じりやくに禮記らいき曰いわ人の居ゐるとして眞身まみと殺ころして忠ちゆうに死しは左傳さでんに忠ちゆうを
人の望のぞむを宋そうの文天祥ぶんてんしやうを忠ちゆうに死しして顔色がんしよくを以もて韓成かんせいの身みと殺ころし
て忠ちゆうと属まむ逆さかみ祠ほらと居ゐる小建こたてるありし其忠そのちゆう死しを賞しょうふと祠ほら廟ぼに
建たて後世こうせい英名えいなに賞しょうふる宋そうに豐道ほうだう報ほうふと云いふ

東海道名所圖會卷之一

あ

